視　察　報　告　書

〈山口県下松／島根県津和野〉

島原中心市街地街づくり
推　進　協　議　会

まちづくり事例地視察報告書

山口県下松／島根県津和野

平成７年２月２３，２４日

島原中心市街地街づくり推進協議会

◇目次◇

趣旨説明……2
参加者名簿……3
行程……4
レポート……6
議事録……68
写真……82
講師一覧……92

街づくり事例地視察会（ご案内）

島原中心市街地街づくり推進協議会の活動計画のひとつとして、視察会を下記日程で実施します。今年度は、山口県下松市と島根県津和野町です。下松市は市街地再開発事業を誘導した商店街活性化と住環境の整備を推進されており、津和野町は水路と建物等の地域特性を活かした街づくりで、いずれも成功事例地です。事例地の視察は、これからの街づくりを進めるのに重要な要素になりますので、ご参加下さいますようお願いします。

○ 視察日時　平成７年２月２３日（木）～２４日（金）

○ 視察地　山口県下松市「下松駅南地区都市活力再生拠点整備事業」
　　島根県津和野町「環境保存条例等」

○ 視察行程

・２月２３日（木）

集合時間	午前７時５０分	
出発時間	午前８時００分	
集合場所	島原商工会議所	
視察地	山口県下松市	視察時間14:45 ～16:45
宿泊先	山口勤労総合福祉センター笠戸島ハイツ 下松市笠戸島１４番地 電話　０８３３－５２－０１５０	

・２月２４日（金）

視察地	島根県津和野町	視察時間10:15 ～11:45
島原着		19:00

○ 参加費用　１５，０００円／人

○ 申込締切日　平成７年２月１０日　ただし、募集定員３７名になりしだい締め切らせていただきます。

○ 申込先　島原商工会議所内　島原中心市街地街づくり推進協議会事務局
　　末永、北村
　　電話　６２－２１０１

----------き--り--と--り--せ--ん----------

視察会参加申込書

氏名	（フリガナ）	性別：　男　女 年齢
住所	電話番号	

（注意事項）お申し込みの際は、参加費用を添えてお申し込みください。

街づくり事例地視察会　参加者名簿

推進協議会

			会社	自宅
会長	古瀬　亨	㈱ミッキーシューズ	62-4560	62-6120
	本田　正二			63-3630

鯉の泳ぐまち地区協定研究会

委員長	島崎　徳雄			63-3464
副委員長	吉田　耕三	㈱吉田正八商店	62-4107	63-6464

中央公園研究会

委員長	鹿田　信雄	㈲美乃本店	63-3030	64-5678

核施設研究会

委員長	中山　千尋	㈲ボヌールグローシングループ	63-5111	63-5111
副委員長	城島　真一	カメラの城島	62-2413	62-2345
〃	兼田　雅和	㈲兼田商店	64-2002	64-2002
	内田　憲一郎	㈲内田自動車整備工場	62-2858	62-2858
	入江　敏昭			63-1497
	石川　俊男	㈾とみや商店	62-2528	62-2528
	佐藤　勝亮	㈾佐藤電装	62-2649	62-2649

森岳地区街づくり協定研究会

委員長	猪原　信明	㈾猪原金物店	62-3117	62-3177	
事務局	松坂　昌應	㈲わかば写真館	62-4414	62-7144	
	光永　健一	㈱光永商店	62-2291	62-2291	
	小川　泰一	月光堂	63-6775	63-2933	
	（大石　正幸）	㈲大石商会	63-1470	63-1470	欠席
	安藤　直樹	安藤電機店	62-2912	62-2912	
	島田　論一	島田菓子店	62-4740	63-6626	

街づくり推進協議会　事務局

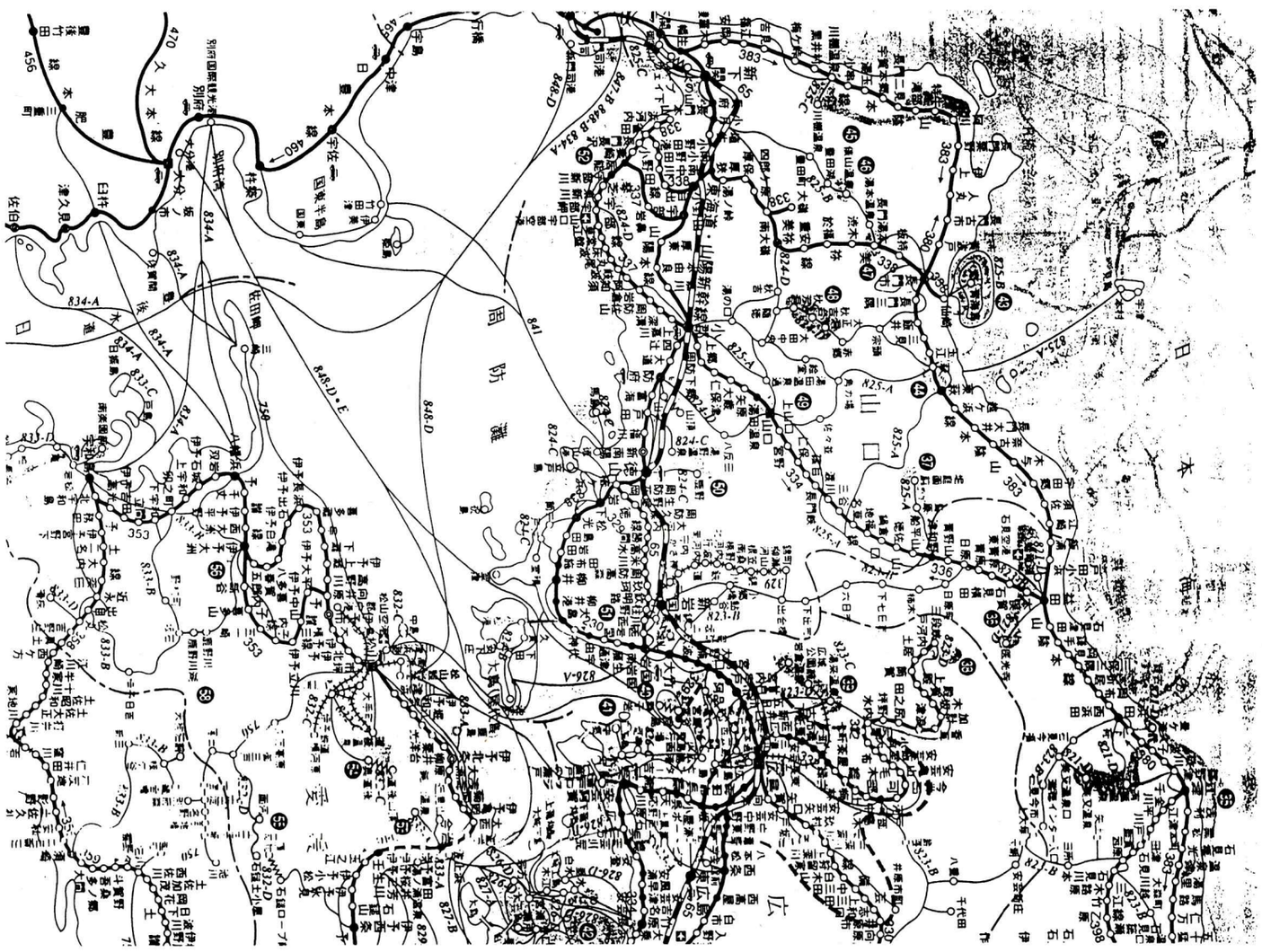
北村　正保	レデースファッション　グラス	63-6615	64-2866
末永　節夫	島原商工会議所	62-2101	63-4124

市役所

大津　義兼	都市整備課	63-1111
森川　正則	〃	63-1111
永田　充	建設課	

視　察　研　修　行　程　表

月／日（曜）	行　　程	備　考
２／２３（木）	島原 8:00 ⇨ 諫早ＩＣ 9:15 ⇨ 川登ＳＡ 9:50～10:00 ⇨ 古賀ＳＡ 11:20 ～11:30 ⇨ めかりＰＡ（昼食） 12:15 ～13:00 ⇨ 徳山東ＩＣ 14:20	○視察地 山口県下松市
	下松 14:40 ⇨ 下松駅前（視察） 14:45 ～16:00 ⇨ 下松タウンセンター（視察） 16:00 ～17:00 ⇨ 下松（宿泊） 17:20	
２／２４（金）	下松 8:00 ⇨ 津和野（視察・昼食） 10:15 ～12:00 ⇨ 小郡ＩＣ 13:30 ⇨ 壇之浦ＰＡ 14:30 ～14:40 ⇨ 金立ＳＡ 16:40 ～16:50	○視察地 島根県 津和野町
	諫早ＩＣ 17:50 ⇨ 島原 19:00	



研修で学んだこと

古瀬　亨

島原の商店街は細長い一本の線で結ばれていて、道路の幅員はせまく、国道やバイパスに通ずる横道も細い通りが何本かあるだけです。現在の車社会に対して、機能的に商業活動を展開するには決していい環境とは言えません。

私達は、その都市の顔とも言うべき商店街をこのまま、地盤沈下させるわけにはいかないので「中心市街地街づくり推進協議会」を発足させて、個々の研究テーマを作りながら勉強しているが、その一環として今回山口県の下松市と島根県の津和野町を研修いたしました。

研究のテーマとして

1. 商店街の道路及び交通問題（駐車場を含めて）
2. 中央公園・鯉の泳ぐ街衍・の効果的な活かし方
3. 核施設問題（空地　空店舗の利用）
4. 島原駅より森岳城・大手広場に至る島原の玄関の整備

と言った具体的な問題に取組んでいます。

山口県下松市の本町・西町商店街が取り組んでいる整備事業を中心に述べたいと思います。駅前の再開発に伴うリジョン計画（都市活力再生拠点整備事業）が、昭和62年度に計画されてより今日まで、マスタープランに基づき、道路の拡幅にともない、店舗のセットバック街づくり協定の設定共同店舗の設立など平成5年度から出来る部分を少しずつ実行して着々と進行している状況です。

商店街の会員の意思統一からプラン作りへ、そして実行に至るまでの並々ならぬ努力をされているようで、現場を見学したあと、推進協議会の田中会長の話を約一時間聞きましたが その苦労を苦労と思はない実行力には大変感心致しました。

会長の優れたリーダーシップと市の都市計画課との綿密な連携のもとに粘り強く取組んで、ようやく実行出来る段階に来たことやまだ先々開発建設の段階では幾多の困難な仕事もあると想像されるが、それを一つ一つクリアーして毎週勉強会をしている姿には本当に頭の下がる思いでした。

要約すると、個店の近代化努力と共に商業集積力を共同の力で高める努力をすることが大切です。今後ますます郊外と中心地の競争・都市間の競争の激化で地域型商店街の商圏の再分割が更に進むことが予想される中で、商店街の生き残りを賭けた商業地盤の区画整備事業が緊急な課題である。そのためには個店の魅力を基盤に商業集積力を協同の力で高める努力がより一層求められなければならない。商店街が一致団結して整備事業を理解して自分達の力で街おこしに取組み行政機関と一緒になって「親しまれる子ん達のまち」を創り出すべきである。

大体以上のような事を勉強して来たわけですが、私達島原も災害を乗り越えて今こそ立ち上らなければいけないと痛感致しました。

下松タウンセンターと言う大きなショッピングセンターとヘルスランドを併合したスパランド施設も見学しました。これは担当委員会の報告があると思います。津和野町に関しても専門グループの研究会より報告がありますけれど役場そのものが観光の対象となっていること、町ぐるみで水と史料と街並みづくりに一生懸命している姿は見習うべき所がありました。

以上報告終ります。

津和野の環境保全条例は行政主導型の制定ではなく民間主導型の制定であるという経緯をふまえ、いかに地元の意識の高揚と協力体制が必要であるか思い知らされたことである。

殿町通り(鯉の泳ぐまち)一帯の城壁の白壁、教会など夜のイベントとしてライトアップし、幻想的効果を創り出したのは、何も観光客のためではなく、地元住民が自由に楽しむためのものであるということや、歴史的な古い街並み、屋敷を見せるのは簡単で、観光的な意義もあろうが、そこに人が住まなければ、映画のセットみたいで何の動きも価値もなく、そこに住む人々が快適で便利な生活空間を創り出して行くことをオーに考えるべきだという住民本位の考え方に注目した。

ややもすると観光地の古い街並みや屋敷に住む人々は多かれ少なかれ訪れる観光客のために気がねをし、自由を束縛されている傾向が見受けられるが、このような街並み、家敷とそこに住む人々とのかかわりあいを住民本位に位置づけ、調和工夫に意を配している津和野の考え方に、我々はもう一歩角度を変えた視点で見つめ直さなければならないと思う。

下松総合計画の基本的な考え方、目標、経緯等についての説明や、21世紀へのまちづくりとして下松駅南地区都市活力再生拠点整備事業についての手法、経緯等懇切に説明を受け質疑も交えた上で結論として言えることは、都市整備や開発に伴う、地元住民、地权者に、いかに理解と協力を求め、納得させるかという問題である。

大きな事業の必然的な前提条件として、これらの障害は宿命的なものがつきまとうが、この障害を克服したときに計画しようとする事業は、ほぼ成功に近づいたと言っても過言ではない。

時間をかけて何回も何回も地道に協議を重ね、説得を続けられた下松の例は成功した事例として今後我々が目ざす過程のなかで大きな教訓として肝に命じなければならないと思う。

（島崎徳雄）

「下松・津和野研修視察を終えて」

安藤 直樹

今回の視察研修で感じた事を下松・津和野とに分けて書きます。

<下松>

下松では現在随時行われているリジョーム計画に関する内容が主であった。共同での建て替え・セットバックとハード事業も着々と進みつつある。駅の向う側には西友・文化会館・休日診療所が一緒になったショッピングモールがあり、近隣からの集客を受けもっている。

商店街としては、共同での事業を行い、通過していくお客様を一人でもつかまえようと頑張っているが、少々距離があるために、核施設というより現在では共存共栄という訳にはいかないようだ。しかし車のお客様のために駐車場を作り、道路に駐車スペースを作り歩道も作り、後継者がいないという問題をかかえながら各店の店主の方は有志で組合を作り、明るく頑張っている姿には感動しました。リーダーがいて、行政の事任がいて、バカになって一生懸命やっていった事が今の下松の商店街を引っぱっているようです。

会議も木曜会として、毎週木曜日に三々五々集まって語りあっている。人々の本音の語りあいや、つながりは街づくりにとっては大変重要である。隣人と話もできないようではどんなりっぱな事業でも一歩も進まない。

<津和野>

今回の視察研修では時間に限りがあって津和野は少々時間不足だったが、色々な問題点という意味で参考になる所も多かった。

観光地として萩・津和野は定着しているが、津和野は観光ズレしているという役所の方の話もあったが、観光客相手の街づくりをしているために住民にとっては住みにくい町になっているようだ。それに歯止めをかけようとやっているのが、パチンコ屋をはじめ、プレイスポットというのは弱干短絡的な気もする。街なみ協定の先進地として様々な協定によって、商店街の町づくりを行っている。確かに統一感をもたせた街づくりは自分たちのこれからの活動の参考になる。表だけの統一でなく、高さなどの制限は自分の店の個性を出しながら街ぐるみの統一イメージをもたせられるという事で、少なくとも倉敷にならずにすむ。

問題となるのは、観光客にこびている部分が出すぎている事にある。住民のためにはいい町かどうか分からない。

自分達の街づくりを考える時も、自分達の住みやすい町である事が基本でなければならないと思う。一番住みやすい町が一番いい町という基本は守っていきたい。若い人だけがいい町だと思えるだけでなく、老人も子供も障害者の方も快適にいられる町はいい町であると思う。

核施設研究会　城島真一

◦下松駅南地区都市活力再生拠点整備事業について。

このリジョーム計画に大いに興味をお覚えました。

島原中心市街地街づくり研究会のテーマの商店街活性化のモデルとして十分に検討に値すると思われる。

今回はミーティングの時間が十分にとれなかったので、関係する研究会で再度・下松市のリジョーム計画を詳明に検討し、核施設研究会の中に、(もくは別の研究会)として、リジョーム計画に取組く必要がある。

このため市、商工会議所、街づくり推進協議会(商店街、関係町内会を含む)の三位一体の協力、又県、国のパイプ役としての協力、安井設計等の専門家の協力、と並々ならぬ努力が必要だと思われます。

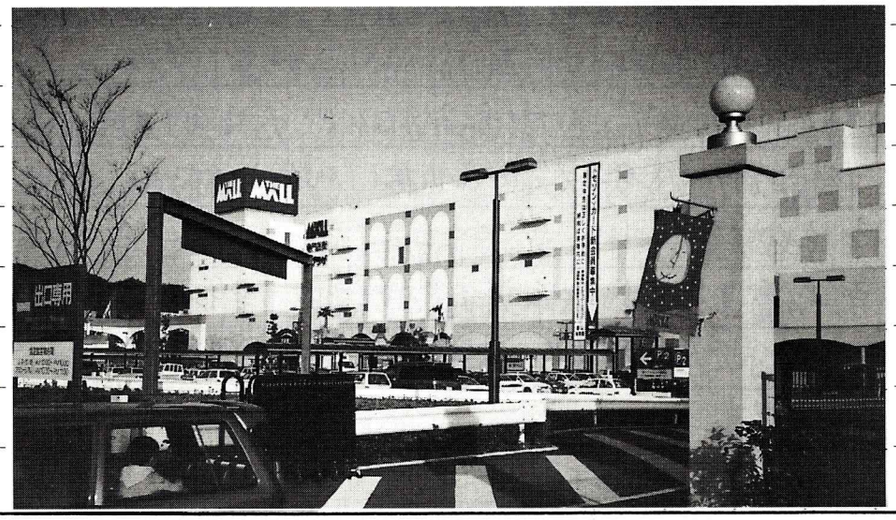
核施設研究会のテーマ、"国光屋跡地等の再開発"だけでは再開発、や活性化になりえない、中心市街地の街づくりが大きなテーマとし存在し、このテーマのコンセプトを中心に、それぞれの、各商店街、町内会の意識づけが、底辺からの力となり、事業が推進していくものです。

核施設研究会はその中で、アーケード商店街の再開発の諸問題を含めた研究会として、あり方を考え直すべきであろうと思います。

◦下松タウンセンターについて

このタウンセンターは規模が大きくて、そのまま参考にはならないが、下松市総合計画の策定、そのシンボルゾーンとしての下松タウンセンターの整備、又、出店の地元商業者の受け皿として第3セクター(下松商業開発株式会社)の設立し、土地の売買契約を締結した手法、市と商工会議所の協力による(株)西友の誘致の手法など学ぶべき事柄にことかかない。

商業施設、と文化会館等の公共施設の有り方、駐車場と交通アクセスの諸問題の事、特定商業集積整備基本構想の承認等の国サイドの補助事業の詳明を自分達で再度勉強し、安井設計との綿密な打合せが必要であろう。



街づくり事例地　下松市　　平成17年2月23日

午後2時すぎ到着へ　4時まで説明会　（4時より文化健康センター見学　6時まで）

(1)予想

私は島原中心街へ活性対策として類似した大型店舗の影響対策についての如何と思っていた

(2)下松市は山口県の有名なコンビナート徳山市の隣に近く瀬戸内海に面する良港、大正末期より昭和初期は臨海工業都市として発達、近年環境変化で新しい未来都市への脱皮をのぞまれていた人口53余、交通は便利の地勢である

(3)下松市総合計画　昭和63年策定

特長　文化施設と商業地域の集積を目的とする

従って広域の土地の確保が条件　永年の交渉がつづけられた　(イ)昭和53年日本石油貯油地跡地無償借り受け利用　(ロ)昭和63年国土土地の売買契約成立　下松商業開発(株)発足　後大型店「西友」の誘致や専門店(地域)結集し(ハ)平成5年11月に広域共存の文化健康センター商業施設が同時オープンした

(4)特長　として商業機能のみならず広い住民の公益機能のため多くの人々のふれあいの場を作る。

(5)まとめ

島原、青葉台やまず永年計画の中、市の行政方針と併せて各地区毎に手近かなものから一歩一歩、人間同志交流結束が大切です。

高島2丁目町内会　本田正二

視察研修の目的はそれぞれの土地の状況事情を学び、参考になる所があれば自分の特色を生かすことで自己反省である。実行については行政と地域の協力。

津和野について

実地の市内見学は1時間以内で勝手も分らず近い所をあるいただけでよく分らず。清い40米ほどの流れの川あり橋も立派であり、街並もおちついて、街の中に引いた鯉のいる堀割はゆるやかゆっくりで水溜りの感じで活潑に泳ぐ姿はなかった。

役場（建物和風造りで古い町に似合う）当局は永年の環境保全条例の実方施により街並の整備や自然環境や固有の歴史的遺産の保存につとめている

山間に囲まれ一万人余の人口の古い城下町で水清き永年の伝統が感じられた。　一方我が島原、

私は永年近くに住んで朝夕通る新町の鯉の泳ぐ街は発足10年位なるでしょうか当初より環境改善、施設も出来たが残念道路が狭く、ゆっくり休ける場所なし、霊丸記念館前の鯉との連絡分りにくい、近くの中央公園の噴水池や周辺の清掃なされてない、多年の要望である。

津和野は近くに史蹟が多く案内板の連絡がよくまとまっているようです。観光の街の感じです。

平成17年2月24日

高島2丁目町内会　本田正二

下松・津和野 研修を終えて　No.1

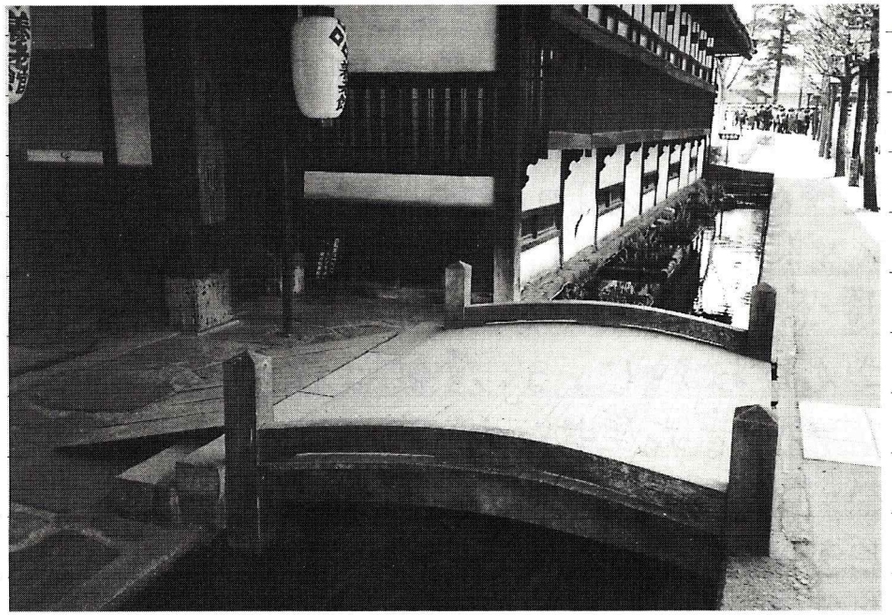
星ふる町下松、そして津和野「シタマツ・ゲマツ」
なんと呼ぶのだろうと思いつつ 2/23日 8時 商工
会議所前にて車中の人となる。隣の席は兼田君
さっそく昔話に花が咲く。
壇ノ浦PAで吉田耕三君と合流 聞けばめかりPA
に車を置いて歩いて関門橋を渡ってきたそうだ。
いつもバスの車中にかかせないカンビールが今日はない
昼食の時となりのテーブルでおっさんがうまそうにビンビー
ルを飲んでいる。そこですっくと立って一言いった
「生ビールください」泉ピン子風のウェイトレスはこれ見よが
しにうまそうにビールを飲んでいるおっさんの方をちらっ
と見て「ビールは置いてません 持込みもだめです」
素早く昼食をすませ帰りに買う土産に目ぼしをつける
そしてようやく下松に着く。林田正剛君が合流。
平成4年バスで国会請願に同行したことを思い出した。
バスを降りて下松駅南地区へと足を運ぶ。そこには
島原よりも閑散とした商店街があった。下松駅南
地区まちづくり推進協議会会長の田中さん・吉次さん
のイノシシ年コンビの話。街作りには4人のバカが必要
そして右手に夢と希望・左手にソロバンの話に大いに
感銘を受ける。なるほど街作りは人づくりからだと
痛感する。夕食の下松名物 笠戸ひらめがまこと
に美味。同室のメンバーと相談し夜なべ談議に
入る。兼田君の右手にはすでに一升ビンが握られ

ている。聞けば森岳商店街のメンバーは下松の
木曜会に参加をしているとの事。さすが行動力がある。
302号室では佐藤勝亮先輩のネックレス事件のて
んまつを皮切りに島原の活性化の話で大いにも
りあがった。中山核施設の委員長は大変おと
なしい人だと思っていたがけっこう○④○で
安心した。後半は古瀬会長・北村君・石川君
市役所の森川君等も加わり大変有意義な時間
をすごした。ミーティングのあと騒音防止法に抵
触するレベルのステレオ攻撃に悶悶として枕を頭
にかぶる城島真ちゃんの姿があったという。
もちろん騒音の主はだれか私は知るよしも無い
さて翌日イケロ津和野へ。時代劇にでてきそうな
作りの役場へそこでいきなりレクチャーに入る。
できれば町を見てからにしてほしかった。
説明が終わりイザ津和野の町へ
環境保全条例の制定により古い街並がつづく
水路には大きな大きな1メーターはありそうな鯉が
悠然と泳いでいる。すかさず城島君が「憲一郎
さんのおよじょる」昼食は松方弘樹の店。店員
がマイクで土産物の説明。ところが「一品でも買っ
ていただかねば困ります。私の顔もたてて下さい」
ときた。「何であんたの顔ばたてにゃんとかにゃ
とは言わず ここじゃ絶対買わんと心に誓って店

をした。一通り土産を買って帰路に着いた
今回は久しぶりに研修旅行と胸をはっていえ
るものであった。お世話をして下さった市役所
のみなさん会議所の末永君本当にありがとう
ございました。翌日松坂君より連絡が有り
テレビで見た下松も大変参考になりました。

内田 憲一郎

津和野：養老館まえ



先日の視察皆様大変中身の濃い
視察になったと思います。
下松では、一番感じた事は毎週1回
「木曜会」を開らいていることで常に街
づくりの事を頭に置いていると言うことでした。
それと、4人のバカで自分たちでもバカ
にならなきゃいけないのですが、役所
のバカがいかに大事かと言うことが
わかりました。
あと、公金運用の点で危機不足だな
と感じました。
津和野では、町で水を利用していた
が川の汚れが目立ち、家庭排水や、
農業用水などが流しっぱなしで、特に家
庭排水の配管整備がなされていなかった。
観光地化はされても、はたして住みよい
町なのか、と言う点で考えさせられました。

森岳まちづくりの会
島田諭一

「まちづくり推進協議会の施行に思う。」

香川まちづくり協定研究会　小川泰一

レポートの提出にあたり、現地視察の時間が、あまりに短かく、大いにものたりなかったことをまず、明記せざるを得ないことを断っておきます。現地視察が短かかったゆえにレポートの内容は、みな同じと思うので、現地への批判をさけて、良かった点のみを書くこととします。

まずは下松から---。

先進地とはいえ発展途上の段階で、ある程度の完成型を見たわけではないのだが、あそこまでできたのも、相当の汗を流した結果であることがうかがえる。人間は、だれでも、想像の部分での話だけでは、動かないと思うが、現実に完成された部分を見せられれば、大きな感動を体験できるもので、今後へのデモンストレーションとしては、かなりの効果を上げ、完成型となる時間もより、短かくなるのではないだろうか？。

それには、「まず想いあり!!」、真に街の発展を願う者同志が、個人的には、できないことでもその結集力をもって物ごとにたちむかっていく。私たちは、このたび街づくり推進協議会という、新たな仲間を得たわけであるから、各研究会が、下松の木曜会のごとく、末長く議論を続け、島原市に一つでも多くの完成実例を作っていくための努力をしなければならないと思っている。

さて津和野であるが、「あんなものである」という意見や、「水は、島原の方がきれいだった。」という人が多いであろうが、考えてほしいのは、ここである。逆手にとって考えれば、あんなよどんだ水の鯉でさえ、鯉の泳ぐまちをアピールできるのであれば、島原はそれ以上のものを作らねばおかしいでしょう!!私たちの街、島原は全国のどこよりも水の美しさを大事にする努力をしなければなりません。俗に、「○○の小京都」ということばがあり、津和野も、「山陰の小京都」とありましたが、島原

を、そう呼ばせようとするのは、愚の骨頂であることを肝に銘じておかねばなりません。

所詮本家には、かなうわけもなく、見に来た人を、にせものがこれくらいで京都を名乗るのかと、冷笑され、落胆され、リピーターが来ることがない一見客を対象とした観光地となり、飽きさせないために小手先の品変えの雅事に追われるのが オチです。幾度となく来てもらえる街とは、どこの街のマネでもなく独創性をもったものだと思います。「島原」を見にくるのであり、島原を味わいに来てもらえるように努めていく心を大切にしていきましょう。生産高が日本一になったそうめんが、「三輪」の銘柄で売られる訳 、島原の名は、有名になりません。人の宣伝をしてあげて、どうしますか？自分に、郷土に誇りを持てなくて、どうして人を呼ぶことができるでしょうか？ 観光旅行に行ってみやげに大メーカーの酒を買ってきますか？雰囲気のよい小さな造り酒屋で、ちょっとめずらしい、ちょっ

と高級な酒を買ってくるでしょう？東京に行って、文明堂のカステラを買いますか？

食料品のみやげだけでなく、商品、生産物に、誇りを持てるような、他と競合することのない物を作り、売れる商品としましょう。

そしてそこには、大事なことがもう一つ。それらを作り、見せ、売る人のハートです。いつも笑顔のたえない街、人に優しくできる街、郷土に誇りを持ち、ゴミを拾うことより落とさないように努力する街、これらのことを作ることが、大変むずかしいのですが、モノを作るのも人。汚すのも人。こわすのも人のなせる業（わざ）です。あえて、昔のことわざを持ち出す必要もないでしょうが「成せばなる」のは、昔も今もかわらないということを、もう一度しっかり心に刻みつけようではありませんか？

街づくり事例地視察会

我々核施設　出席メンバー8名で　全体の研究会では
一番出席者が多く　下松　津和町を視察研究しようという
意気込みがあったようです
島原から7時間の長距離バスの旅で　スタートから勉強会
下松駅周辺地区都市活力再生拠点整備事業（リニューム計画）
ザ・モール周辺　星プラザ（下松タウンセンター）
それに津和町の概要の説明を受けました。
私は、下松が人口4万4千人、島原より少し人口が
多い位で、下松タウンセンター（ショッピングセンター）が
採算ベースにのっているのか、又は出店した旧商店街が
どの位の打撃を与えられたか、出店している旧商店街の人々が
どの程度の採算ベースにのっているのか！
大型ショッピングセンターの出店で　下松の街にどのような
影響を与えたか。　この目で見て　内容を聞きたい
旅でした。
下松には予定どおり着、まず下松駅周辺地区まちづくり
推進協議会会長　田中氏と下松市役所建設部都市
計画課　吉次氏の案内で、まず商店街を一部視察
事務所の屋上で　下松市の全体の概要を聞き、
勉強会となりました。
人口4万4000人　量降る町　笠戸ひらめが下松の町の
アピールだそうです

下松タウンセンターは駅前商店街から1キロ
歩いて約15分の所に位置し、
周の企業は　日立製作　東洋合板　日本石油精製
中国電力　笠戸造船ドックがあります
平成4年11月4日　下松タウンセンター　オープン
西友を核にした　大型ショッピングと文化会館
健康センターをドッキングさせた建坪10万坪の
大型ショッピングセンターです
旧商店街の人達はタウンセンターに入るのも地獄
出るのも地獄という事で　当時は大変だったようです
年間タウンセンターは460万人の来店数が有り、
年間の売上目標は全体で170億円
現在のところは146億円で　86%の売上高だそうです。
全体でタウンセンターに専門店が44店舗入店
している。
昭和63年8月4日　21世紀町づくり（リニューム計画）
市の方はマスタープランの説明の後、地元商店街の方々で
協力して下さいとのことでした。
元町商店街　本町商店街　本町1商店街　3者で
勉強会をし　市会議所　コンサルタントと地元で組織を
つくり、平成1年6月20日　商店街のブロック0.5
以上者を3・4名出てもらい、推進協議会を発足
協議会のスタートは20名、市からの助成金220万円
で運営、さらに先進地視察をし、

全国、いくつもの町があるなかで、下松独特の
町づくりを考えて、同じ町づくりにならないよう、
まず下関（カーラトピア）高松（ピア高松）
広島、岡山、倉敷、神戸、姫路、奈良
滋賀、長浜、名古屋、三重、稲浜の全国各地
の視察し、平成2年度の事業で中小企業
活性化資金、町づくりリフレッシュニュー本町
の件で、400万円の助成金を申請、360万円の
予算がついた。
道路を1.4mセットバック、街路樹、街灯
地中化の問題を平成4年度に検討する
リフレッシュニュー元町基本計画は地元大学教授
建築設計の専門化を考えて検討する
リフレッシュ元町ベースでの、たつき台は地区促進再開
発事業 400m²以上（これは市が助成金）で
地権者2軒の同意があれば、事業が進んで行く
平成1年12月11日大臣承認（市が申請をし承認
を取ってもらう）をしてもらい、その後地区促進再開発
事業にとりかかる
土質の調査、古い建物の調査、建物の計画
すべて市の補助金がある
市の都市計画の職員が地元の人と一緒に
町づくりに参入、町づくり推進協議会の
商店街事務局に事務職員を置く。

協議会へ市からの支援が6年間で1000万円
その中で、初めの1、2年は視察研修
4、6年度は下松に30団体360名が視察に
こられ、タウンセンターと合わせると40団体にのぼる
商店街では毎週木曜日8:00～11:00まで会合とし
最近は、ほとんど週3回、熱意をもって勉強会をし
毎月2回は市、商工会議所、商店街が
集まって全体会議
片手には商売、片手にはソロバン、夢とロマンを
もって商店街の方々を説得している
2日目は小京都といわれる津和野に入り
人口8000人、まず感じたことは中央に川が流れ
古い街並が有り、ひっそりとした、たたずまい
役場に入ると、役場中が昔にタイムスリップした
ような感じでした。
まず、役場の人の紹介があり、商工観光課の
山国さん、企画係の有原さん、一級建築士の
石川さんに一時間程説明を聞き
その後、街を見学する
時間的に余裕がなく、街並をゆっくり
見れなかったのが、非常に残念でした

中山寿

「下松・津和野」視察研修に参加して

事務局　　末永節夫

下松・津和野は，今回で２度目の訪問であり，津和野（前回は観光）は１８年ぶり，下松は昨年１１月県の労改協の主催での視察研修でありました。
街づくり推進協議会が設立して以来，事務局として仕事をしていますが，商工会議所と街づくりとは，全然関係がないと思っていました。しかし，忙しい中この研修に参加できたことは，とても良かったです。まずは，島原の悪い空気から抜け出し，街づくりとはどんなものか楽しみでありました。なぜなら街づくりということがピントこなかったからです。研修内容・交流会等，今までにない内容の濃いものでありました。特にびっくりしたのは，バスの中での意見交換・感想発表等が終わるまでアルコールが出なかったことです。

感じた事

下松駅南地区街づくり等について

① 人口の割り商店が少ないような気がする（人通りに関しても）
② 計画の全てが，立派であり何年か先が楽しみである
③ 便利な交通環境がいいので商店街の活性化は，可能である。
④ リジューム計画の７つの基本方針の中の個性・活気あふれる島原の中心商店街整備，多様で快適な市民生活の拠点づくりが必要であると思います。

下松タウンセンターについて

① 消費者の立場としたは，よそに買い物に出なくても一箇所で済ませることに魅力を感じる。
② 島原の商店街とは，全然違うので参考にならない。（スケールが違う）
③ 資金があればできるが，土地があっても必要性がない。
④ 建物（特にどん帳の下松をイメージ）にびっくりした。
⑤ 娯楽等がないため，イベント等には人が集まる。（島原も同じ）
⑥ 休日診療所は，島原では必要がない。
⑦ 文化の発進地となり，産業文化の集積地点となる街づくりであるかもしてないが，島原と同様若者の集まる場所でない。
⑧ 住みよい町であるが，おもしろさ楽しさがないという点では島原も同じである。

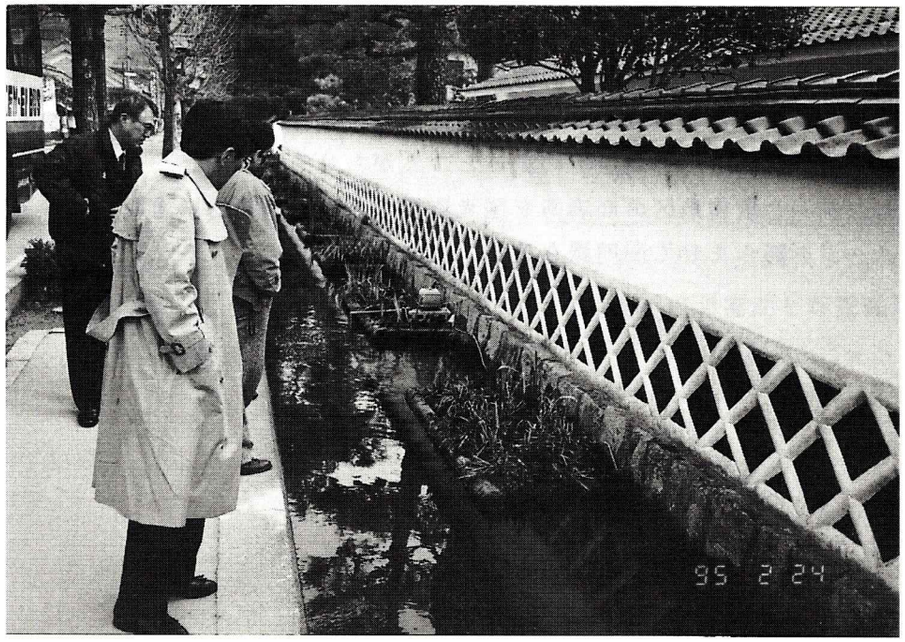
津和野町

① ゆっくりと散策したかった。（もう一度訪問したい）
② 商業の町ではなく，観光の町であることを改めて感じた。
③ 水も汚く，鯉が大きくて気持ち悪かった。
④ 伝統的建築物等が多く，心が落ちつく町である。

⑤ 町並みがとてもきれいである。
⑥ 商店は，ほとんど観光土産物ばかりで寂しかった。
⑦ 静かであり，環境も良く，島原と同じように老後に生活するには良い。

感じた点は，以上であります。

下松・津和野と島原に似ている所の視察研修でありましたが，あらためて島原の良さを実感いたしました。また，今後の街づくり・商店街活性化が進むためには，一人一人が，情熱を燃やし続けることです。視察研修で学んだことを生かしたいとおもいます。参加された一人一人が努力されれば，島原の町は変わると思います。



津和野：殿町、役場の向いの堀割

片手にソロバン　下松津和野視察レポート

森岳まちづくりの会　　松　坂　昌　應　（わかば写真館）

視察に出る前夜は遅くまで仕事。帰って来たらすぐまた仕事。仕事の合間のまちづくり。今回は大手で初市をやろうという企画まであったので、やたらに忙しかった。森岳の仲間は小企業ばかりなので、日常業務もこなしていかなければならない者が多い。だから１泊２日をひねりだすのは容易なことではない。他の研究会の人たちも同様だろう。自腹も15,000円、絶対タダでは帰らんゾ！

仕事から離れることもめったにないから、視察以外に、風呂に入って、ゆっくり皆と飲んで話もしたい。あれもこれもと欲張る。スケジュールはハードになる。林田バスはありがたい。移動時間も活かせるからだ。

私の場合、資料など事前に準備出来ていたのだが、自分たちの地区に関係しそうなのは津和野だけだろうと考え、新町の島崎さんたちの２年前の津和野（萩）視察の報告書および津和野の町勢要覧、景観保全条例に目を通した程度。下松については、国光屋跡地の核施設の参考程度だろうとタカをくくって、何も勉強していなかった。

貴重な資料を渡されても、車酔いせぬ程度と眠らない程度の境目が難しい。バスの中の大津さんの事前講義、皆の意見発表はありがたかった。憎まれ役の大津さんであったが、今頃皆に感謝されているだろう。「おやおや、下松は駅の近くの商店街に見るところがありそうだぞ。」下松のタウンセンターと駅南地区の商店街を国光屋跡地と森岳商店街に重ねあわせてイメージを膨らませて関門橋を渡る。

◎下松駅南地区都市活力再生拠点整備事業(リジューム計画)

(REfreshment of Street and Urban Market Energy＝RESUME＝ﾘｼﾞｭｰﾑ)

下松市建設部都市計画課の吉次敦生さんの案内で下松駅から歩いて商店街に入る。どこにでもありそうなさびれかけた商店街、車社会以前からの街並み、狭い通り。古い２階建てビルにのぼる、既に事業が済んだ一角を確認しながら現状を眺めて、そのビルの２階に入る。下松駅南地区まちづくり推進協議会で借りてある部屋だ。

昭和６３年(1988.3.31)「リジューム計画策定」から１年後の平成１年(89.6.20)地元による「下松駅南地区まちづくり推進協議会」発足、半年後(89.12.11)には「地区再生計画・街区整備計画」建設大臣承認。

＊街区整備計画区域(1.4ha)は地区再生計画区域(24.2ha)の中の早期事業化を目指す中心商店街部分 ── この度の視察区域。

平成３年(91.10)いち早く、承認区域である元町西街区が、市街地再開発事業および地区再開発促進事業を有効に活用して事業化に入り、平成４年11月に地区再開発促進事業による協調建替事業が一部完成。会長田中さんのお店を含むセットバックした例の場所である。

＜一方では平成５年11月西友を核とするタウンセンターもオープン。＞引き続き次の協調建替事業ブロック（私たちが説明を受けたビルを含む一角）も始動。元町西街区が火付け役となり、隣接の駅前地区・本町地区も活発に動き出している。

ここまで動きだすと、これはもはや「絵に描いた餅」じゃない。全国からの注目も浴びることとなる。吉次さんの説明によると、年間３０団体の視察を受けているという。タイヘンだ。私たちもその１団体という訳だ。

行政支援として、市から協議会へ年間約１８０万円の補助と専従職員（吉次さん）派遣、コンサルタントなど。「うーむスゴイ！」

ここで吉次さん大きな釘を差した。ここまでの支援にこぎつけたのは、地元の頑張りがあってこそ。（木曜会を含めて毎週３，４回は集まっているという。）結果的に官民一体で大きな進展をしている。それなのに視察に来た団体さんは、一様に、地元団体の方は「行政の支援があるからだ」と理解し、行政関係の方は「地元が頑張っているからだ」と理解して帰ってしまう。と。自分のことはタナにあげ……。

私たちは、地元の一人としてまず何が出来るかを考え、とにかく自分たちが、動きださなければダメなのだということを肝に銘じようではないか。市役所だ会議所だという前に、自分の出来ることをまずやろうではないか。

すでに、「島原市中心市街地街づくり推進協議会」は私たち地元の手にある。マスタープランを提示した市役所（都市整備課）が、協議会の発足に呼び掛け役を果たしてくれて、便宜上、会議所に事務局を置いているが、この会の主役は私たち地元住民であることを忘れてはならない。連絡係を会議所の末永さんに任せきりにしたり、資料の準備、視察旅行の段取りを市の大津さんや森川さんに「任すっけん、適とーに頼むばい」じゃダメなのである。

帰りのバスの中で、この度の視察の段取りについて、あれこれ反省や提案などをする仲間の口調に、自分たちが主体であることを忘れて、いわゆる役所に対して（もしくは、他人に対して）モノ申すといった雰囲気を感じたので、あえて、苦言を呈する次第。「津和野はもっと見る時間をとって欲しかった」ではなく「……時間をとりたかった。」と言うべき。取り超し苦労なら幸い。

すっかりみんなに溶け込んできた大津さん、森川さん、末永さんに対して「行政のバカになってくれろ」のエールを贈るのもいいが、「僕が地元のバカになるから」を、まず宣言してからにしたい。○○くんや△△さんのようにすでに誰もが認める「まちづくり地元バカ」以外の人は、恥ずかしがらずに地元バカ宣言をしてください。

「君が行政のバカになれば俺は地元のバカになる。」というのと「俺が地元のバカになるから君も行政のバカになってくれろ。」というのは、似て非なることを確認したい。本題に戻る。

下松駅南地区まちづくり推進協議会会長田中公一良さんの話もわかりやすく、田中さんの人柄まで感じさせるものだった。絵に描いた餅にしないよう、具体的な事業に持ち込もうと、各町を説明してまわり、（たえず下松の独自性を意識しながら）あちこちの先進地を視察し、駅前が（自分たちが）どうにかなれば、下松に足りないものが獲得できると信じて、木曜会を初め、とにかく人間関係でまちづくりを頑張っている。そんな熱意が感じられた。地元が熱意を持ってやっているうちは行政も会議所も支援してくれる、という確信。

そして名言（テレビでも言ったぐらいだから、田中さんの十八番だ！）。まず商売あればこそ、「片手にソロバン」、（そしてもちろん、あとの）「片手に夢とロマン」を。解釈は各自自由だろう。私には今の仕事がら、とても田中さんたち（や○○くんや△△さん）のようには頑張れないなあと思っていたのだが、田中さんも片手にソロバンを持っているのが嬉しかった。ソロバンの種類や大きさは各自違う、自分の出来る範囲でやればいい。もちろん、このことは森岳の仲間ではいつも確認し合っていることである。それぞれが自分の出来る範囲で頑張るんだ。もう片方の手の夢とロマンを忘れずに。それで良かったら周りは認めてくれなくても、自分で自分を「まちづくりバカ」に認定しよう。（さあ始まった森岳の自己満足！）

安藤君が、帰るまぎわにマスタープラン資料の委員名簿から、＜大川陸＞の名前を発見。島原の調査にも名をつらねている大川さんじゃないか！それだけでなんか島原も事業が具体化しそうな気がするねえなどと、ところで今日は木曜だぞ。「今晩木曜会はあるんですか？」などとさぐりをいれるバカがチラホラ。

◎下松タウンセンター

思ったより南地区から離れていた。森岳に対する国光屋跡地というより、森岳に対するＩＶＹ建設予定地という感じ。

出来たばかりできれいだった。

吉次さんは、センター内のいろんな人と、気安く声をかけ合っていた。

◎木曜会　　時間外特別授業

薄暮のタウンセンターを後にして、笠戸島に着いた頃は、もう暗くなっていた。定番の夕食会。酒を酌み交わしながら、同行の志士たちと懇親を深める。アーケードの方の人たちにも面白そうな人がいるようだ、討論会第２部に移行する模様。こちらも面白そうだが、「木曜会が始まっている頃だなあ」思い立って「外に出よう」と誘いをかけた。

猪原君、安藤君、島田君と４人でおそるおそる事務所のドアをノックした。田中さん、吉次さんそして木曜会のメンバーの方たちが快く迎えてくれた。この日は吉次さんの上司の野村課長もおいでだった。大方の話は済んで、雑談に入ったところですとは言っていただいたが、さぞかし迷惑だろうなあと、恐縮しながらも、早速まちづくりの苦労話に耳を傾ける。缶ビールもごちそうになる。つまみまである。見ると私たちが昼間届けた土産のうに豆だった。

木曜会のメンバーは、各商店街の仕掛け人たちだ。一人の説得に２２回も通いつめた話、苦労がたたって十円はげが出来た話、今だから笑える話。マスコミも仲間に入れなさい。年配の人の話を聞いて引っぱり込みなさい。左うちわじゃダメ、危機感が必要。いろいろ助言をいただく。

あなたたちはいいねえ若い人が多くて、おまけに島原は（普賢岳がなくても）全国に知れ渡っている歴史がある。頑張りなさい。と励まされて、思い切って来て良かったと思う。良かっただけで終わらせず、必ず実行に移すぞと、とりあえず酔った勢いで思い込む。いつの間にか、北村さんが入って来ていて、熱心に話に聞き入っていた。

田中さん吉次さんに連れられて下松で一番の（ママさんも美人）お店でごちそうになる。引き続きまちづくり心得を伝授していただく。ここで仕入れたまちづくりの奥義はとりあえず私たち５人だけの免許皆伝ということで、このレポートには報告しない。（文章ではうまく伝えられないから、又の機会に……）

予定どおり、駈け足で、ゆっくり皆と飲んで話して、ゲームもやって、早起きして風呂にも入って、うーむやはりハードだなあ。バスは津和野へ向かう。大津さんの車中講義と意見発表は続く。眠いけどありがたい。

◎津和野

周囲を山にかこまれた盆地の川沿いに広がる町。気がつくとしばしば旅行パンフレットで見かけた津和野のコイの泳ぐ町並。その真中にある町役場、木造で大正時代からのものらしい。

木の床がキシキシいって懐かしい。はじめに商工観光課の山岡浩二さんが行政の側から、続いて商店街の若手リーダー石川卓夫さんからの説明。私たち外部の者に対して、飾ることも背伸びすることもなく、実情を話してくださった。聞きたいことが山ほどあった（水の今後、電柱地下埋設、観光業者と地元の協調、などなど）。しかし、未だ見てもいない段階ではあそこまで。〔水のことについては別原稿を提出－参照ください。〕

現在２０名足らずの商工青年部。石川さんたちが抜けると、１２～３名になるという。人口は１万人以上あったのに、過疎化に歯止めがかからぬまま6800人まで減少。ディスカバージャパン（昭和40～50）以来、外来者（観光客）のためのまちづくりが進められてきたのではないか、との反省のもと「住民のため」という視点で新たな展開を目指しているという。

石川さんたちの危機感とは裏腹に、とりあえず（観光で）食えている現状。観光業が地元にもたらしている経済波及効果を理解しない住民。地元消費者をつなぎ止めようと、動く商工青年部。打つ手はあるのだろうか。

島原に使えるネタはないかと、１時間、カメラ片手に歩きまわる。
役場前のいわゆる観光拠点殿町から、そのまま商店街が続き「く」の字に折れて正面にＪＲ津和野駅がある。
石川さんと交換した名刺を頼りに当該地名あたりから電話を入れてみようと思ったときにはハイカラな建築事務所を「く」の字の折れ角に発見。

昨日の（木曜会の）いきおいで「こんにちは」。戸をあけると、書類片手に石川さんが飛び出してきた。「これから現場なんです。」失礼を詫びて去ろうとする私を呼び止めて、３０秒の立ち話。駅から真正面の角地が空地になっている。そこを指差して「駅の方からのお客さんを引き付ける何かをと考えているんです。」そそくさと仕事に走って行く石川さんの後ろ姿。「片手にソロバン」か。田中さんの言葉を思い出して感慨深いものがあった。

〈山口県・下松タウンセンターの視察を終えて〉

下松市は人口5万3千人の瀬戸内の都市として瀬戸内海公立公園に含まれる景勝の地で、しかも東洋鋼鈑・日立製作所・日本石油精製・中国電力を中心とした臨海工業地帯で戦前から工業の街で栄えて来た、この地に新しい街づくりの芽がいぶいています。

鉄鋼・造船など素材型工業に偏った経済構造から商業サービスとバランスのとれた都市へ生まれ変わろうとしています。

産業構造の転換とあいまった動きはハードからソフトな街づくりへ転換と言えそうです。

昭和63年下松市総合計画を策定し将来都市像を「新しい産業と美しい自然―出会い・ふれあいのまち下松」として魅力ある都市づくりを目指し、下松の地名の由来は北辰星が松に降りたと伝説があり星をテーマに街づくりが進んでいます。キーワードはまず"シーポート・シティ"海・港に近い中心市街地のある事を生かし将来の笠戸島リゾート構想も念頭に置き、マリンレジャー海に開いたターミナルとしてイメージ作りを目指しています。

2つ目は"ひらめ"はこの地の名物でひらめを中心にふぐ・わこぜの栽培・漁業が栄んです。

3つ目は"たま手箱"独身女性だけのグループでイベントを中心に活動を続け、又人々の定着を主眼に置きグループでのカップルもこれまで60組が誕生したそうです。「魅力ある下松の顔と個性づくり」で市内100haの部分を「シンボルゾーン」と位置づけ、その中で拠点形成として

中央町北広場における商業文化拠点として「下松タウンセンター」が平成5年11月にオープンしました。単に商業機能のみならず地域住民にとって不可欠な公共公益企業（文化・健康センター）と併設する事で広域的に集客性を発揮し人々が集い・ふれあい・精神的欲求が満たされる楽しい空間を創り出す事を目標にしています。

「下松タウンセンター」は大きく3つの施設「ザ・モール周南」「文化・健康センター」「下松タウンセンターSS」から構成されています。「ザ・モール周南」は核店舗となる〈西友周南店〉地元から全国チェーンの店舗まで集めた〈ザ・モール専門店街〉

地元業者の専門店〈星プラザ〉、食と遊びの〈食遊館〉の4つのゾーンで構成され、建物は"星"と"地中海"と"ギリシャ"をイメージした夢のある空間を見せてくれます。

「文化・健康センター」は文化の創造と市民の健康を守る施設で休日診療も受けられ、商業施設に付随した、サービスステーション「下松タウンセンターS・S」からなり4万6千m²の敷地に開発された商業と文化を象徴するシンボル的存在として位置づけられ、売上高156億の施設です。

下松市は近くは徳山市近、車で15分広島市山口市近、1時間半から2時間の距離にあり他の市に流出していた個人消費をくい止めた点や

雇用面において施設の役割を大きく果たしで此思えました。又都市間競争に負けない様、下松市役所の意気込みもうかがえました。
私、個人、ブティックを経営していますが、今迄の情報をもとに婦人服を中心にテナント専門店分野西友ゾーンとの感性・質感・価格帯等のバランス、テナントの採算性の問題等を注意を払いながら見学しました。今後大型店の出店は売場面積5,000坪から10,000坪の規模になると予想されるが、その中に出店するか既存の商店街で商売するか、生き残りの為のサバイバルゲームを目の前に見た感を受けました。
現に下松市地元の商店44店舗が「ザ・モール周南」に出店、地元に残って街づくりに取り組んでいる下松駅南地区、どう進展して行くか注目したい。
今後ホテル建設を中心とする駅前開発、物流拠点づくり、温水プール・スポーツ公園等の「平成の森」構想、バイパス整備等、市総合計画が進行しているが、そんな中、街でタクシーの運転手さんや地元の人の話を聞く機会があり彼等は下松市の特徴・すばらしい所を宣伝はしてくるし、街に誇りを持っている事を会話から聴き取れ、行政と市民が思いをひとつにして都市・街づくりに取り組んでいる姿が印象に

残り脳裏から離れません。
私も"ちょっとステキな島原"実現を夢見ながら島原中心市街地街づくり協議会の活動を続けて行きたいと思います。
今回の視察研修を企画して下さった島原市に対して深く感謝申し上げます。

島原中心市街地街づくり推進協議会
核施設研究会会員
北村正保

津和野役場：説明会風景

下松津和野視察

森岳町づくり委員会
光永建一

下松について

我々森岳まちづくり委員会は下松駅南地区まちづくり推進協議会の内容と実際の運営について勉強したいと思い下松視察を行なった。まず下松は市がマスタープランを作りそれを町全体に提出、半年がかりで説明を行なったとなっている。島原の場合は、そのマスタープランがまだはっきりせず市民に話がいきわたっていないように思われる。

次に内容と運営ですが、いわゆるバカが2人（会長と市の職員）いるとゆうことである。これはまちを変えるきれいにする、運営する上でひじょうに大切なことではないだろうか？まちづくりを推進するためには、こうゆう人が出てこないとなかなかむつかしいと思う。

下松は少しずつではあるが人口も増加している市である。逆に島原は少しずつ人口は減少している。下松は市が全体であるとゆうことである。下松の市民が市の出したマスタープランを良く理解しその実行に対し見守っているといゆことだ。市の観光・物産（ヒラメは島原の方がずっとおいしい）をどしどし売出しているのが町全体にみなぎっていた。

森岳まちづくり委員会が駅前通りのセットバックについては、下松商店街のセットバックを見て、たしかにすばらしいとは思うが、島原で実行するのはなかなかむつかしいと思った。

スターピアくだまつ（下松文化会館）については、大変すばらしい建物であった。これだけの物を作るには市によゆうがあって土地があるとゆうことでうらやましいと思う。

館内の地元商店の量プラザでは売上げはまあまあとゆうことであった。

前日テレビで下松の放映がありましたが、新聞に載らない観光地、物産がまだたくさんあったんだなあと思いテレビを見たあとで行っていたらと思いました。

津和野について

萩・津和野といわれている観光地は歴史と水の観光で女性をターゲットにした観光地であるが、これからの観光としてもっと何かないものかと思う。島原の観光も何を売りものにするかどうゆう人にターゲットをしぼるのかを話し合いをしないとすたれるばかりと思われる。津和野は20年前に観光地としての1ハ1をみたして発展したが、今現在はいきどまりを感じられる。島原も水をテーマとした観光をさけばれているが、島原の水はきれいではあるが水の量が全体にとぼしく、水をテーマとするにはあまりにもひんじゃくである。

今回の視察は先方との話し合いが時間的にもっとあったらと思います。

下松駅南地区まちづくり推進協議会の田中、末次両氏の話を通して印象に残った事は、まちづくりの手法よりも、むしろまちづくりに参加する側の姿勢、気構えに関する点だった。

「信念と熱意をもって、根気強く続けていけば、それは実現します」

まさしくその通りだと思うが、我々の心のどこかに、やる気と努力だけで果たして、まちづくりの事業が実現するものなのかという半心半疑の部分が潜んでいないだろうか？

「島原中心市街地街づくり推進協議会」が結成され、住民と行政がタイアップして、まちづくり事業に取り組むという試みは、島原はじまって以来の事であり、過去に何の経験も実績もないのだから、そのような心理が働くのも当然かも知れない。　また、事業を進めていく中で絶対にぶちあたる問題、例えば、具体的計画の作成と合意、意識改革、資金、土地、等々、現実に越えていかなければならない困難なハードルは数多くある。

それなのに、なぜ、人々はまちづくりをするのか？

もちろん、地元に対する愛や、未来への夢が原動力になっていることは確かである。

しかし、湯布院や日田豆田、熊本新町、今回の下松、津和野の視察研修で、まちづくりに、たずさわっている人々を見ていると、どうも、それだけではないような気がする。

人間が創ることの歓びを知っている唯一の動物だとするならば、現代において、その歓びの究極に位置するのが、もしかしたら「まちづくり」ではないだろうか？

つまり、彼等は、まちをつくるという大変な行為の中に、その究極の歓びを知ってしまった人達なのかも知れない。

そうでなければ、平均年齢56歳という立派な大人達が、少年のような眼で、まちづくりを熱っぽく語っている風景を説明することはできない。

下松の協議会の人達と話をするうちに、週3回以上集まる熱意と、それを楽しめるようになりさえすれば、まちづくりの事業は実現するという確信を深めた。

下松タウンセンターは日本石油跡地の広大な敷地に西友を核とした大型商業集積と各種文化施設をあわせもった近未来的な建物で、「すごい!!」の一言につきた。　ただ、莫大なお金をかけ光ファイバーを駆使した大ホールの緞帳は、自分の市民感覚では理解しがたく、少し考え込んでしまった。

翌日の津和野は実に20年振りで、初恋の人に再会するような心の高鳴りを覚えたが、時の流れは、当時の牧歌的な手つかずの田舎から、洗練された美しい田舎へと姿を変えていた。　きれいに整備された水辺で鯉をながめながら感慨にひたっていると、もう帰る時間だと言う。

ここは、少人数でたっぷり時間をとってくる観光地なのだ。

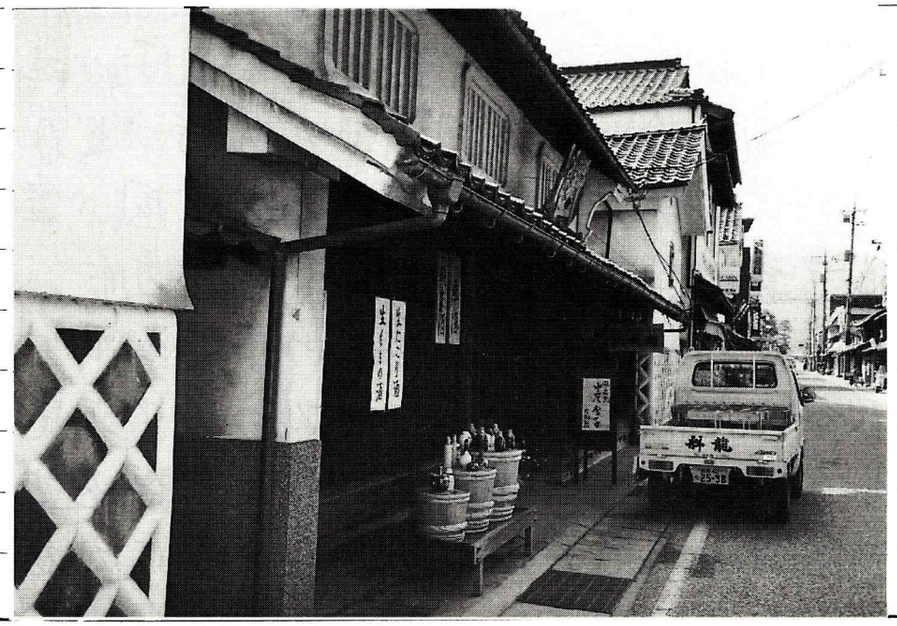
一つだけ哀しかったのは、タレントの店の存在、客の呼び込みをしていたのは、もっと哀しかった。

島原は、観光の素材には恵まれている。　これをいつまでも色あせないものとして守っていくのは、大変なことだと帰りのバスの中で思った。

下松駅前にバスから降りて感じた事は
寂れた町だなーと思い案内されて行った。
事務所らしき所も決して綺麗と言える所でも
なかったが説明をされた素晴しいバカ2人の
話しに感動したのは私一人ではなかったと思う。
あれだけの情熱を持ち努力されるなら
下松駅周地区まちづくりは近い将来、
成功するものと思う
島原にもあんなバカが何人いるのだろうと
思ってみたが これから出て来るかな……
事務所を出て下松の街中を見廻したら
来た時とは違った感じを受けたのは不思議である
シンボルゾーンの中核という下松タウンセンター施設を
見学に行った。文化会館、健康センター、
商業施設、駐車場を見て廻り、規模の
大きさに驚いたし、これだけの物が思い立って
土地を買い建築と、良く5年間で出来たなーと
感心するばかりでした。
又、商業施設で立ち寄った店では
店主はいず従業員だけで話は聞けなかった
のが残念でした。
下松市は金持ちだなー。単純な感想です。

津和野。イメージ通りの町でした。
小京都と良く聞くが この雰囲気が小京都と
言うのかと納得。
奥津の泳ぐまち。島原の奥津の泳ぐまちと比べて
みようと思って行ったので主に気は奥津へ最初は
「ブリ」かと思うほどの太さに驚き
時代を感じた。
ただ水の量と水の綺麗さでは島原だ
今回初めて視察研修に参加しましたが
最新の建物、設備、古い城下町のたたずまい
を見ても、兵庫大震災が頭の隅に有り
どうするんだろう、どうなるんだろうが
正直なところでした。（佐藤勝亮）

津和野：商店街の酒屋（２階がギャラリー）



No 1

街づくり事例地視察会に参加して

万町商店街　兼田雅和

今回島原中心市街地街づくり推進協議会の活動の一環として，成功事例地である山口県下松市の市街地再開発事業を誘導した商店街活性化と住環境の整備を推進されている「下松駅南地区都活再生拠点整備事業」と私が所属している核施設研究会の事例として「下松タウンセンター」視察研究させていただきました。

1日めの下松市では，まず「整備事業」の説明を聞いて行く中で感じたことは，説明をされた協議会々長の田中さんの街づくりをやっていくうえでの，強い意志と，固い信念，そして柔軟な対応と前向きな考え方に，リーダーシップの有り方を教えられました。その上に街づくりを推進していくうえで注意されている事は，まず焦らない事。無理をせず，できる所から手がけていき，時間はかかって

No 2

も一歩づつ着実に作りあげて行く事が大事だという話しでした。そのために毎月の定例会や毎週の勉強会、幾度となく先進地の視察研修等を実施しながら，意思の疎通・コミュニケーションを計っておられるとのことでした．それと行政のバックアップの素晴らしさにも驚かされました。協議会の専従職員として市役所の職員が1名出向されていて，官民一体となってこの事業を推進されていました。

この「整備事業」は通産省のモデル事業の第1号として認定されて推進されているとの事でしたが、この話しを聞いていて思った事に、今回の阪神大震災によって普賢岳災害のための復興予算が、島原にこれ以上回ってこないのではないかと心配する声を聞きます。しかしこれは逆に島原を，災害復興のモデル事業、パイロットプランとして，国に強く働きかけていくチャンスではないかと考えます。阪神地区の場合，今だ復旧の段階であり，復興は何年も先の話しでしょう。島原の場合もま

だまだ復旧と復興が錯交せになった状況ではありますが、復興に向けて少しづつではありますが一歩づつ前進しています。このことを強く国に訴え、復興の先進地として位置づけをし、復興成功事例地になるように官民一体となって訴え続けていく必要があるのではないでしょうか。そうしなければ島原は本当に忘れられてしまいます。我々の「推進協議会」も復興の為の再成事業である以上、この事を念頭において推進して行かなければならないと思います。

次に視察した「下松タウンセンター」は市の施設である文化健康センターと西友を核としたショッピングセンターの複合施設であり、コンセプトは日本初のハイ・アメニティ・マートとして、ショッピングを楽しむだけではなく、コミュニティ・アメニティー機能のあるエンターテイメント施設として、地域の社会や文化の中心となり、楽しみとうるおいのある空間を提供しています。

核施設研究会としては、単に箱物を作るのではなく、地域の文化・歴史・産業・生活・観光・火山噴火等の情報発信機能に、地域住民に役にたち、又地域住民が望むでいる施設やサービスを盛り込むだ核施設にしていく事が大事ではないでしょうか。

「下松タウンセンター」は商圏人口70～80万人を想定した巨大施設であり、島原の市勢からすると、大きすぎて参考にならない面もありますが、施設のコンセプトには大いに学ぶべき点がありました。

次の日は島根県津和野町に移動して鯉の泳ぐ街と歴史的な街づくりを視察しました。詳細は「街づくり協定研究会」のメンバーや、それ以外に参加されたメンバーの方に譲りますが、津和野の印象は街全的が統一的に整備されており、非常に見ごたえがあるのですが、あまりに整備されすぎていて場所によっては、全国どこにでもある時代村や、映画のオープンセットの中に迷いこんだような感覚に

No 5

なる所がありました。何ごとも過ぎたるは猶及ばざる如しなのでしょうか。

最後に、旅行とは非日常の連続的な体験の時間と空間という事を、改めて確認する事ができました。島原を訪れられる全国のお客様にこの時間と空間をいかに提供していくかを考えさせられた視察研修会でした。次回も機会があれば、また参加させていただきたいと思います。

島原中心市街地街づくり推進委員会

事例地視察研修会報告書

核施設研究委員会　　石川俊男　とみや呉服店

平成７年２月２３日(木)

◎山口県下松市総合計画(1988年策定)

○下松駅南地区ＲＥＳＵＭＥ(都市活力再生拠点整備事業)計画

元町西商店街(４３店)　　ＪＲ下松駅南側の再開発事業

まちづくり推進協議会(２４名・平均年齢５５才)

毎月２５日全体会議　毎週一回小会議

市助成金１８０万円　月会費２０００円

(発足時２２０万円　月会費１０００円)

毎月市長・助役と話し合い

特色　・市都市計画課から専属で一人出向

・「建設大臣承認」をとる

感想　・まちづくりは地元の人の熱意が一番大切だと痛感した。

○下松シンボルゾーン構想

下松タウンセンター　　日本石油タンク跡地を利用

大型複合施設　(駐車場１５００台)

ザ・モール周南

西友

星プラザ　地元商業者専門店

食遊館

文化健康センター

文化会館　　光ファイバー緞帳４０００万円

保険センター

休日診療所

感想　・とてもすごい施設で駐車場が広いのが強み

・モール周南きれいで広く星プラザも無難にまとめている感じ

あまり個性的な店は少なかった。

平成７年２月２４日(金)

◎島根県津和野町(人口６８００人)　観光客　年１２０万人

山陰の小京都　城下町　　江戸時代からの水路に鯉を泳がしてる

津和野町環境保全条例　Ｓ４８

津和野町地域住宅計画(ＨＯＰＥ計画)　修景技法によるふるさとづくり

感想　・さすがによくまとまった感じの町並みだった。

・大きな鯉の泳ぐ用水路は思ったより水がよどんでいた。

〔島原に生かせること〕

・心構え　街づくりには熱意が必要。官民一体でバカになって取り組みましょう。

・方法　早くマスタープランを完成させ、まず建設大臣承認を得る。

国光屋跡地には複合施設が良さそうである。どんな？を出し合いましょう。

島原の鯉が泳ぐ町は大きな可能性を秘めている。水がきれいなのは強み。

今回の研修会は大変有意義でした。世話役の方々本当にありがとうございました。
百聞は一見に如かずで、実際自分の目で見て得たことを故郷島原に生かせるようがんばりましょう。

街づくり視察研修報告書

○　報告者　　中央公園研究会委員長　鹿田信雄

○　期　日　　平成７年２月２３日（木）～２月２４日（金）
　　２／２３　島原商工会議所前　ＡＭ８：００出発
　　２／２４　島原商工会議所前　ＰＭ７：００帰着

○　視察地　　山口県下松市
　　島根県津和野町

昨年の平成６年１２月に島原中心市街地街づくり推進協議会が結成されて、早くも３ヶ月近くに成ります。　その間に各研究会を開催し、少しづつ理解を深めている段階であり、今回の視察研修は、先ず見てそして同じ共通話題を基に各自それぞれがどのように考え、また将来的に島原をどのようになったら良いかなど議論することにより、お互いの意志疎通も計ることもできるので意義のある研修であった思います。

早速ですが下松市と津和野町に対して具体的に述べてみたいと思います。

◎下松市（山口県）

下松駅前に着いた時に、本当にこれがＪＲの駅前であるのかと疑ってしまった。最初から島原とある程度人口が似ている処ということは聞いてはいましたが、自分の頭の中では、日本でいち早く商店街や街づくりを国の助成などを活用して活気づいている街と云うイメージを持っていたからだと思います。

島原駅と比べても何も無意味なこととは分かってはいるものの、何か安心と云うか島原駅が立派なだけに優越感と伴に、このような環境の中だからビックリするものが出来上がっているのではないかと期待感を持ちました。

下松駅南地区では、建設省が’８７年度に創設した「都市活力再生拠点整備事業」REfreshment of Street and Urban Market Energy リジューム計画として、衰退しつつある商店街など地方都市の中心地を再開発する。　これは、市街地再開発事業や共同ビル建設、個別の店が協調して建て替えるなどの整備事業を活用し道路など公共施設など地区全体の整備を進めている事業であり、下松市では実際に実行の段階にきているのでいろいろと勉強をさせていただいた。

下松駅南地区街づくり推進協議会の田中孝一良会長と市役所から派遣されている、都市計画課の吉次事務局が応対していただいたが、やはりリーダーシップを発揮している人とそれを側面から支えている人が一緒にいれば、困難なことも乗り越えていくパワーを感じ、話しの中でもあったが街づくりには４人のバカが必要であるそうだ。「地元のバカ」「行政のバカ」「専門家のバカ」「よそもんのバカ」が集まれば街は動いていくと云うことであり、確かに下松市の場合はそれがあったからここまでやってこれたのだと思った。

下松のリジューム計画はＳ６３年３月に策定されてから６～７年間掛かって、協調建替事業の一部が完成しており、島原の場合は噴火災害が有ってから、既に４年近くなっているので、これから６～７年間掛かってしまうようであれば将来に対して不安なども多く、その他にもいろいろと影響が出てくるのではないかと思われる。
少しでも早く復興及び振興策に結び付けられるように、下松市を始め各地の状況など先進地を参考にしながら、いろいろな事を吸収し、今しか出来ないと云う危機感を皆が持ち、島原に合ったものを出来るところから実行していく必要があると思った。

下松タウンセンター外

◎津和野町（島根県）

「萩・津和野の旅」などと、よく耳にはしていたが実際にはどこにあるのかも余り知らなかった。　しかし今回、視察研修に行くということで事前に調べてみても、萩の近くであり当然山口県である位に考えていたので少々違いがあった。　さらに現地に行っても、水路など水と緑という島原のイメージと似ていると考えていましたので、ついつい比較をしてしまって「島原の水」が綺麗だと感じて、優越感を味わい島原の湧水の有難さが改めて分かった。　やはり週刊誌のアンノン族で有名になった処だけに、本当に湧水の郷に住んでいる者からしてみると、川から引いてきた水路に家庭排水なども混ざり、余り綺麗でない水路を見ても感動するまでは至らなかった。

町役場など古い建物をそのまま保存しながら、現役で使用しているのには感心させられた。　ただ町役場としての機能からして、これからも使用を続けられるのかなと勝手に心配もしてしまった。

津和野町環境保全条例を制定してあるが、そこに住んでいる住民が生活に不自由があれば何の為の条例か分からないと思っていた。　しかし、町役場の係の報告によれば住民の為を考えて、例えば水路をライトアップをするにしても観光客に見せるものでなく、住んでいる住民に提供する事を常に念頭に入れているそうだ。

そこの場に関係が無い人や回りからはいろいろなことも言えるが、実際に住んでいる方々の利便性も考えて行かなければならないので、簡単に見えても大変難しいことだと改めて感じた。　よく「総論賛成・各論反対」などと聞きますが、だれでも納得出来る条例等がベストだと思います。しかし実際に条例など策定する時、漠然とした一般的なことだけでは意味がなく、余り細々（こまごま）となるとなかなか合意が得れないといった状況だと思います。　街づくりをしていくうえでは、当然クリアしていかなければならない事柄であるので、しっかりと勉強をして実践につなげられるように頑張る必要があると思った。

◎まとめ

今回、視察研修に参加してみて、バスの車中等での勉強会や討論会及び反省会など街づくりに対して真剣に考え、実際に現地を視察し現地の声を直接聞くことにより、参加者全員の意識が向上したことは大変プラスになり、今後の街づくりに大いに役に立つことがあると実感しました。

各研究会にとっていろいろな視点から勉強になったのではないかと思う。　例えば核施設研究会は「下松市特定商業集積整備基本構想」による、下松タウンセンターとして西友を核とする大型集積がオープンしており、ハード面及びソフト面でまだまだたくさん吸収するものがあると思います。　また休日診療所などがある文化健康センターとして複合施設があり、その周辺にあった小公園というか休憩する場所には、ストレッチ体操が出来るような鉄棒や背伸ばしが出来る長椅子など健康器具でありながら、しかも景観的に違和感がなく気分転換や休憩施設として中央公園研究会の研究材料となると思った。　又、下松駅前のリジューム計画等での協調建替えは道幅を以前の幅約６㍍を２倍に広げ、建物は道路境界からさらに１．５㍍　後退させ、ゆったりしたスペースにタイル舗装し街路樹を植える計画であり、水頭縦線研究会には大いに参考になると思う。

そして、鯉の泳ぐまち研究会及び森岳地区研究会にとって津和野町は大変参考になったと思った。　条例の策定、生活をしている住民との協調や水の生かし方など、学ぶことも多く、島原らしさも造っていく事が特に重要である思った。

今回の視察研修は準備期間も短かったにしては、視察地等の選定など市役所の都市整備課の職員をはじめ関係者の皆様のお陰で有意義な視察研修が出来たものと思い、何年か後には今以上に価値有る視察研修になるように、更に皆さんと頑張っていこうと考えています。　　どうもありがとうございました。

島原市中堀町157
㈲美乃本店
鹿　田　信　雄

水の将来《津和野と島原》

森岳まちづくりの会　事務局　松坂昌應

「水」は島原のキィワード。

国土庁が水を生かした町づくりをしている地域として認定する「水の郷」（全国３４ヵ所）に、島原市が選ばれた。これはつい先日(H7.3.11付)のホットニュースであります。すでに島原は環境庁の「名水百選」にも「島原湧水群」として指定を受けております。

この度の島原中心市街地街づくりのマスタープランでも「水」のことは強調してあります。島原を良く知る片寄俊秀先生も水・水・水とおっしゃっていますし、先般会議所青年部でお呼びした、福岡の観光アドバイザーの先生（岡部定一郎氏）も「水の利用」を勧められました。

こうした外部からの高い評価を引き合いにだすまでもなく、私たちも仲間で寄るたびに「水」（水）〔水〕『水』【水】と話をしているところであります。島原再生の重大要素として「水」を取り上げ、島原独自の素材として、島原らしさの象徴として、カタカナで言えば島原のアイデンチチィとして、「水」を生かす方策を検討しているところであります。

問題点が２つ。①水の汚染
②湧水量の減少

具体的な例として、最も島原らしいとされている武家屋敷の水路に流れる水がすでに汚れてきているということ。　原因は、水源の一つであった熊野神社の湧水量の激減と生活排水の混入などが挙げられる。

昔は、この地区には家も少なかったので生活排水そのものが少なく、大量の流水が、押し流し汚れる間もなかったという訳です。それが生活排水は、増えるだけでなく、いわゆる化学洗剤など現代人の生活様式の変化によって質的に変化してしまい、本来水の持つ浄化作用が通じなくなってしまっているのであります。（そしてこれまたボーリングの乱掘、火山灰の堆積などいろいろ言われながらも、原因はハッキリしないまま）湧水量が減ったことにより、「水の汚染」が水量によってごまかしがきかず、誰の目にも明らかになってきたのであります。（これはすでに全市な問題。）

心ある一部の市民からの報告や提言、外部の識者からの忠告にもかかわらず、まだまだ圧倒的に「見た目きれいな島原の水」の上にあぐらをかいて、抜本的な対策はなされないままであります。市民レベルでは水（まち）を汚さないという意識の高揚が必要であり、その延長上に（行政と一体になった）下水道対策などが課題として出てくることになります。

この度の津和野の視察は、「観光客を呼び込む演出としての水の利用」と「この水の問題の解決の糸口」を、探ることにありました。

『津和野町環境保全条例』（昭和４８年制定）は、その目的を記した第１条に「…美しい自然環境と固有の歴史的文化遺産を保存し、後世に継承するため…」（波線筆者）と唱いながら、具体的には第２条以降、文化財の保存と新たな建築造作に対する景観取決めに終始している。

無論これはこれですばらしいことであります。しかも住民主導の取り決めでほとんど違反者を出すことなく、唯一の違反であるという信用組合の建物でさえかなりの譲歩がされていたようだ（おとなしい茶色）。

その結果、マスコミの手伝いもあろうが、全国から観光客を集めることに成功している。私たちがどんなに「島原の方が水はきれいだ、コイはスマートだ。」と叫んでも、〈コイの泳ぐまち〉を演出するために地域住民一丸となって、町を、一人ひとりの家を、変えていった結果、津和野は今も年間百万人を超える観光客を集めている。

ちなみに噴火前の島原は年間２００万を超える入り込み数（その約２０％の４０万人が宿泊）。津和野は１００万人中その約１０％の１０万人が宿泊。噴火後の島原は噴火前の約半分に減少して、１００万人から少しずつ増加している。（宿泊率は変わらず２０％前後）　人口は津和野町は島原市の約６分の１なので考慮に入れて比較してください。

※参考：津和野町および島原市の観光動態調査

まさかこんな山奥に「環境破壊」や「水質汚染」が起こるものかという、時代でもあったのでしょうが、残念ながら、『条例』から判断できるとおり、津和野町は、「自然環境の保全」については、ほとんど手を着けていないという状態でした。あれだけの整備された景観を有しながら、こと水については、津和野は２度まで行くところではない。

〈また来たくなる島原〉をめざす私たちに、課題は山のようにある。「水の問題」は最初に超えなければならないハードルだと思われる。

◎・下松商店街は、一部ですが再開発が始まっており
行動力、実行力があって見ならう所がある
しかし、島原の各商店街や私(たち農業など)の
後継者や老齢化などの問題で、同じように再開発や
規模拡大などの足なみをそろえることがむずかしいようです。
・下松タウンセンターは、文化と商業をまとめることによって
人の集積化などの相乗効果がみこまれると思う。
島原にも文化、とくに美術館又は市民発表などが
できるギャラリーや展事場を商店街の中にもてればいいと思う
・人口約55,000人と言うことで人口規模はあまり変わらない
と思いますが下松には、集辺の中核都市にかこまれ
島原は、島原が中心となり、集辺に小さな農、漁業
などを中心とする町があるところでは、町の展開ということ
では、参考にはなりませんでした。

◎津和野について
・鯉の泳ぐまち、という先入[redacted]感をもって視察をしましたが
鯉の泳ぐ場所というのは、私が見たところは、時間の関係で
津和野役場の前しかありませんでした、まだほかにもあると
[redacted]思いますが島原のほうが湧水であり、家庭や事業
廃水など合流や混入などなく鯉もあざやかに見えると思います。
しかし島原も「鯉の泳ぐまち」を観光の一つにするのでしたら
島原市役所の玄関前の広場にも、島原駅前にはありますが

回流式の池でも造り、鯉を泳がせて、まず観光客が
島原の大手や島原駅に着いたら、鯉の泳ぐところを
見られるといいのではないかと思います。
・しかし津和野の街には、鯉の泳ぐまち、というよりも
古い街なみや名所、旧跡など観光資源がたくさんあり
すばらしいと思いました
・人口約7,000人のあまり大きな産業などない町に
年間約120万人の観光客の経済効果は、大きなものの
だと思います。ここの役場が観光に力を入れるのは、もっともの
だと思います。
私も、島原が観光地ということを「どこ、とこなかったところが」
ありますが津和野の役場の職員の方が「津和野に観光
客がこなくなったらゾオとします」と言われた言葉が
おもいだされます。私(農、漁業をしている人など)は、
島原には、観光は関係ないと思っていましたが観光客が
もたらす、波及効果を考えると観光もよりできることから
一歩づつ地道でもよりよい街づくりをしなければ
いけないと思われます。

・最後にまた、次の機会がありましたら視察研修に参加できればと
思います。大変視やが拡がったと思います。

・誤字があるとおもいますがうまく理解して読んで
もらえれば幸いです。

街づくり事例地視察会に参加して

島原市役所都市整備課　森川　正則

島原の中心市街地の将来像について、総合的に考え議論し、具体的な整備に向けて、地元住民が中心となり考える組織として、平成６年１２月２１日に、「島原中心市街地街づくり推進協議会」が結成され、その活動のひとつとして今回の街づくり事例地視察会（平成７年２月２３日（木）～２４（金））が、行われました。

この視察会の準備として、協議会の役員、事務局等と市が協力しながら、平成７年の１月から、場所の選定、視察地の役場・民間の方々への視察のお願い、視察地の事前学習を行い、視察会に臨みました。

この時点での反省点として、視察地の資料が少なかったため、事前学習が不足しました。次回は十分に準備を行い、事前に視察地の方へ質問を箇条書きにした文書を送付し、当日の質問の時間を有意義なものにしたいと思いました。

視察当日は、協議会の会員を中心に２３名の参加のもと、貸し切りバスにより、目的地に向かいました。

１日目の視察地は、山口県下松市（くだまつし）で、ＪＲ下松駅の駅前広場に降り立った時の最初の印象は、人が歩いていないなというのを強く感じました。後で市役所の吉次さんの話によると、このような人通りの少ない所を視察された方は、これぐらいだったら自分たちもすぐに事業ができるだろうと考えられ、実際事業を始めようとすると、なかなか進まないとのことです。

駅から歩いて２、３分の所にある「下松駅南地区まちづくり推進協議会」の事務所に行き、協議会の田中会長さんと市役所の吉次さんの説明を受け、その中で印象に残ったこととして、４つありました。

一つ目に、「大きく見える計画も最初は、そこに住む一人一人の小さな思いから始まり、わずかなことの実行の積み重ねによって、前進していくのである。」ということ。

二つ目に、「４人のバカ」がいないと“まちづくり”は、うまくいかない。①地元のバカ　②行政のバカ　③専門家のバカ　④よそ者のバカ　このような４者の熱意がないといけない。

三つ目に、“まちづくり”の事業を進めて行く時に、事業の全体計画については、街がよくなっていくことなので、賛成者がほとんどを占めていますが、実際に事業に入っていき、個人の土地・建物等にかかわっていくと、個人がお金をいくらか出すことになり、事業に反対される方が多く出てくるとのことです。その難しい壁を乗り越え、事業を進めていくには、「地元住民や行政等の地域に対する思い」と「いろんな将来に対する夢、熱意、信念」が必要だということです。

四つ目に、実際に商売をされ、協議会の会長という２つの仕事をされている田中会長さんの「片手にそろばん、片手に夢とロマン」という理論が、印象的でした。

この他、各ブロックごとに毎週１回以上の話合いと市役所・商工会議所等を含めた会議を月１回行われているということで、とにかく街をよくして行こうという根気強い情熱・熱意が、地元住民にも行政等にも必要だということを強く感じました。

２日目の視察地は、島根県津和野町で、石川建築設計室の石川さん、津和野町役場の商工観光課及び企画財政課の方々より説明を受けました。「山陰の小京都」と呼ばれ、毎年１２０万人前後の観光客が訪れ、人口は約６，８００人で、徐々に減少しているとのことです。津和野町の基幹産業としては、観光産業が主で、観光客をいかに集めてくるかに努力されているようです。その観光資源として、古い街なみや建物のよさをアピールしながら、現在の新しい建物との調和を図っていこうとされているようです。また、地元の要望から「津和野町環境保全条例」が制定されたため、罰則はないものの、地元の理解により歴史的文化遺産に調和した建物の建設が行われているとのことです。

しかし、第一印象としては、古い建物がずらっと並び、映画のセットのようできれいではありましたが生活感が少なく、長く住みたいという感じがしませんでした。比較して恐縮ですが、島原の方が、生活感があり、水もおいしいので、いいぞという感じを持ちました。ただ、島原では、いろんな資源を有効に使っていないようなので、これからは、そのあたりについても考えたいと思いました。

２日間を通じて感じたことは、島原もまだまだ捨てたものではないが、危機感が少ないようなので、危機感を持ち、島原のよさを一つ一つ再確認しながら、行ってみたいまち、住みたいまちの創造に向けて、市の職員としてまた一市民として、熱意を持って実行していきたいと思います。

街づくり事例地視察会に参加して

都市整備課　大津　義兼

今回は、中心市街地の再活性化を推進されている山口県下松市と自然環境や歴史的文化遺産を保存し、昔ながらの家並みが残る島根県津和野町でそれぞれ異なった街づくりを視察した。

最初に視察した下松市は、山口県の南東に位置し、瀬戸内海に面した景勝な地で、戦前から工業の街として発達した都市であり、人口はほぼ横ばい状態で約５５千人の都市である。

下松市では、このような工業中心の経済構造から商業、サービス業とのバランスのとれた都市「新しい産業と美しい自然－出会いふれあいのまち下松」を将来都市像に掲げた下松総合計画を昭和６３年に策定している。この中で「魅力ある下松の顔と個性づくり」をテーマにしたシンボルゾーンを設定し、今回視察した下松タウンセンターを商業文化の集積拠点として形成を図ることとしている。

この計画に基づき昨年１１月にオープンしたこの下松タウンセンターは商業機能だけでなく公共公益機能（文化健康センター）を備えた、広域的な集客性が望めるすばらしい核施設となっている。これまでの下松市の商圏は、徳山市と広島方面へ約３割、消費が流出していたが、この核施設により国道、高速道路等の交通アクセスの交通の利便性を逆手に活かした、影響商圏を形成しているといわれていおり、島原の核施設を検討する上で非常に参考にる。

また、一方では、このような郊外大型店舗の計画により、商業の中心地であった下松駅前の商店街への影響が大きく、その対策として中心市街地の再活性化を目的に将来のマスタープラン「下松駅南地区リジューム計画」が市から昭和６３年に出された。商店街では、この計画を単に計画として終わらせるのではなく、具体化しないとどうしょうもなくなる。次代のためにも、新しい商店街づくりは今しかないなどの危機感の中から下松駅南地区まちづくり推進協議会を発足させ、次々と事業化が進んでいる。今では毎年多くの団体が視察に訪れているとのことだった。事業化には、地元からの街づくりの気運が重要で、その熱意が関係者を動かし、息の長い活動へとつなげていくことが必要で、背伸びしない、できる所から進めているとの話だった。

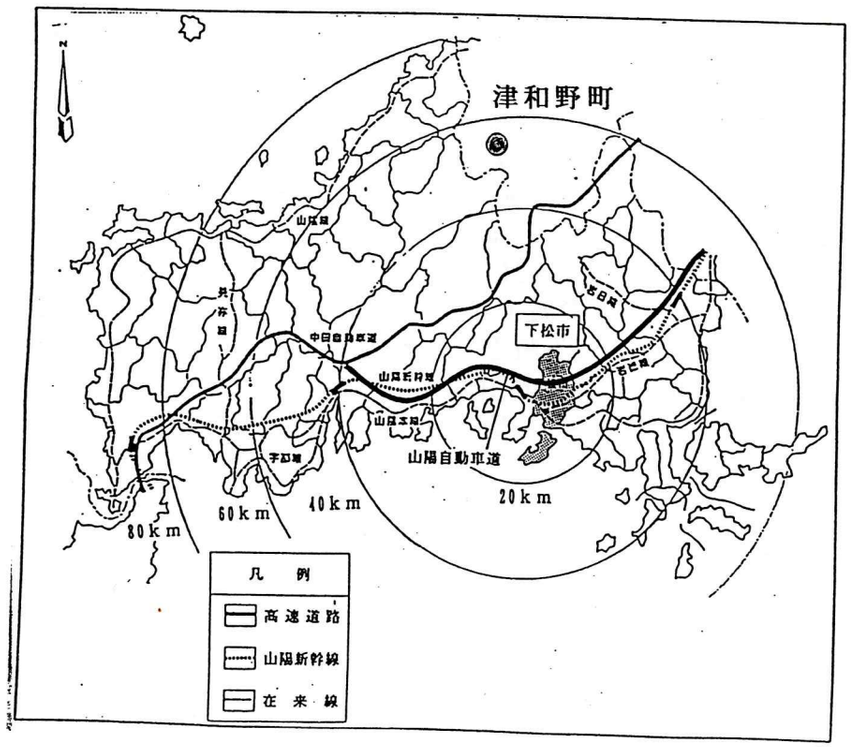
このリジューム計画が市から出され１年間は、全国各地で再開発を取り入れた街づくり事例地を視察して、自分達の街にあった街とはどのような街なのか、どの様にやっていったらいいのか、種々話し合いを重ね基本計画を策定されており、非常に街づくりへの取り組みが活発であった。また市もハード面の支援だけでなく、地元と共にソフト面での街づくりも推進されていた。

翌日は津和野町を視察、ここは観光地ですが、今回訪れて観光を意識しただけの街づくりではないような思いがした。町の説明では、町民が街を守っていこうとの熱意から津和野町環境保全条例ができ、これに基づき屋根の色など建物等にかなり厳しい指導を行い街なみを保全している。最近では、町民の意識はかなり浸透しており、新築パチンコ店を指導して周囲にマッチした土蔵造りにお願いした事例がある。しかしながら、排水等の問題もあり、景観、水質保全を取り入れた条例の見直しを行っている。

また、近頃では観光も重要であるが、町民が住みやすい街への意向があり灯りを外に向けて見てもらう、生きた観光が必要で、いろんな職種にも活かされるまちづくりが必要であることを話され、あらためて、住みやすい環境づくりが、街づくりに不可欠であると思いを深めたところであります。

この様な事例地を直接見て、街づくりを実践されている方の生の話を聞くことは、街づくりを進める上で最も必要なことのひとつかと思っています。今度の視察会の反省点としまして、①視察地の事前資料がまだ不足だったこと②島原の街づくりの取り組み状況を紹介、ピイアールしなかったこと③時間がなく時間に追われた視察になったことなどですが、次回に役立てていきたいと考えます。

最後に、視察会に多数ご参加いただき、ご協力に感謝申し上げます。



街づくり事例地視察報告

市役所建設課　永田　充

平成６年度からの島原中心市街地街づくり事業で、地元街づくり推進協議会の活動計画のひとつとして、平成７年２月２３日～２４日に山口県下松市の街づくり、島根県津和野町の、城下町としての街ずくりの視察に参加する機会があり、簡単に報告します。

建設課としては、推進協議会の市道・掘町縦線（寿屋南側道路）の、拡幅整備と併せた、道路沿いの街づくり研究会に属し、２月９日に会員、専門のコンサルタントと現地を見学し街づくりについての、第１回目の意見交換会に参加してきました。

今回の、下松市での街づくりは、市の表玄関であるＪＲ下松駅周辺地区、４.１ｈａの街区整備計画で、駅前という都心でありながら、木造老朽家屋が密集し都市計画道路の未施工により、時代の変化に充分対応できず商店街が衰退し続ける、市街地の再活性化でありました。

事業は建設省の、市街地再開発事業と、地区再開発促進事業を有効に活用し、都市計画道路の拡幅整備と併せて、建物の協調建替や、建築物、敷地の共同化を検討し、事業化していました。

平成４年には、地区再開発促進事業による協調建替事業（事業の対象は、建物が２棟以上で、施行地区の面積が５００㎡以上）が一部完成しており、次の協調建替事業ブロックの着手が進められていました。

４地区の推進協議会、勉強会が発足し、再開発組合を設立し、１ブロック完成すると地区主催のイベントを開催、都市活力再生ソング（リジュームソング）を発表する等、街づくりにかける地元の気運の盛り上がりを感じたのは私だけでは無かったことでしょう。

津和野町は島根県の西側に位置し、町の南西側は山口県に接した人口７，０００人、２,４００世帯の城下町である。

中心部の津和野地区は城下町として史跡、名勝、文化財があり、年間１２５万人の観光客が訪れる観光的田園都市である。

観光の目玉は、江戸時代の面影を色濃くとどめる殿町と呼ばれる武家屋敷で、復元された土塀や、１級河川津和野川より引いた小さな掘割に、菖蒲を配し鯉をのどかに泳がせた町並みである。

また、津和野町は島原市より遅く、平成３年に地域住宅計画（ＨＯＰＥ計画）で津和野らしさを推進している。

町に残された歴史的文化遺産を、人為的破壊から守るため、昭和４８年に環境保全条例を制定して効果が出ているとのことである。

ただ条例及び、ＨＯＰＥ計画に添った建物の改築、保全者に対する表彰規定が無く島原市の方が努力しているようだ。

町を流れる１級河川、津和野川は県事業で約３.０Ｋｍを「ふるさとの川モデル事業　」として、平成元年度より整備しており、

整備方針は、

① 周辺の歴史資源を活用した祭りや、イベントの場の創出
② 観光資源を結ぶ、緑豊かで楽しく散策できる護岸道路の整備
③ 歴史的資源と河川とが一体の庭園なるよう、護岸は石積で、ステップ護岸を設け河原に降りられ、河川で泳ぐ鯉を至る所で、眺められるよう配慮する

以上の計画である。

周辺観光地である山口と、萩が滞在型であるのに対し津和野は、宿泊者数が１１万人で、日帰り客数が１１４万人と、立寄り型の観光地であり、観光施設が役場前通りの殿町附近に片寄っており、観光地としての広がりに欠けた点を津和野川を整備することにより、川沿いに散在する観光施設相互の、連携を図ることができ、滞在型観光地への脱皮の努力がうかがえる。

島原市も、現在市街地の中心を流れる大手川が改修中であるが、それをどう観光と結びつけるか、課題であると思う。

下松市、津和野町研修視察レポート

平成７年２月

吉田耕三

下松は、町の規模が島原とさほど変わらない人口55,000人の瀬戸内海に面した商工業中心の町です。

この町が全国でも注目される街づくりの先進地です。

隣には福山市があり、当時街の現状を考えたとき街づくりを根本から見直す必然性があったと推測されます。

一口に街づくりといっても、街は誰かが作ってくれると思われる人が多いようですが、実際これにタッチした人でしか分からない、苦労があったようです。

この街づくり協議会会長と、市から出向されている事務局員の話を聞き言葉では言えないような苦労を感じ取れた。

地権者との話し合い、毎日毎日の街づくりの会議、苦労を苦労と感じさせない、街に対する愛情、情熱を言葉の端々に伺い見ることができる。

一商店街の利害よりも街全体のことを考えた、大局的な考えも必要で、核になる施設に福山を視点に入れた大型店セイユーを誘致した事でも推し量れる。

現在では、この街づくりの会に触発されたように、町の各地域に同様の会ができ、地元を考えそれぞれに運動を起こしている。

この視察研修に行って、街づくりとはその土地に生きる人々の、街を愛する心、情熱がすべてと再確認した。

そして行動を起こし、それを継続する事それがすべてであると。

(1) 第15671号　昭和21年12月15日第三種郵便物認可
昭和24年２月29日島原鉄道特別取扱承認第一号

平成７年３月末、島原新聞にこの度の視察レポートを、三回に渡って掲載していただきました。その第１回分を再録します。２回目（兼田さん）３回目（松坂さん）は本レポート集と同内容のため割愛しました。

『津和野探訪』

95.3.28

—島原市街地街づくり推進協議会事例地視察研修会より—

島崎徳雄

山陰の小京都として七〇〇年の歴史を持つ津和野。津和野川の清流に沿ってひっそりとたたずむ城下町にはやすらぎと素朴なあたたかさがある。

津和野藩士の子弟を教育したという藩校（養老館）・亀井氏十一代にわたって手腕をふるったという多胡（たご）家老の屋敷門跡など往時を想わせる由緒ある武家屋敷群。堀割の水面に映るなまこ壁。むれ遊ぶ鯉。昔の面影が随所に息づいている津和野は、古き良き時代を偲ばせながら時間がゆっくりと歩いているような、そんなまちである。

昨年十二月、島原中心市街地街づくり推進協議会が発足。五部に分かれた研究部会（鯉の泳ぐまち地区協定研究会、水頭縦線研究会、中央公園研究会、核施設研究会、森岳地区街づくり協定研究会）がそれぞれ街づくりに取り組み、意見や議論を交わして行くなかで、先進事例地に学ぼうという気運の高まりが、今回の視察研修の旅となったものである。

今日の美しい津和野の歴史をひもどくなかで注目したいのが、昭和四十八年に制定された環境保全条例である。この条例はまちぐるみで残された歴史的文化遺産を人為的な破壊から守り後世に継承しようとするもので、これらは保全地区、特別保存地区、保存建物、保存記念物などに分類・指定され、保存地区内の新・改・増築、看板、広告、宅地の造成、竹木の伐採に至るまでこと細やかに届出を必要とする。

この条例の制定に当たっては、行政主導型で進められたものではなく、保存整備を図ろうとする地元住民の固い結集と熱意が行政を動かした、いわば住民主導型の条例化という経緯がある。

もちろん罰則も補助金もないというが、制定後一人の違反者もでていない。このような住民サイドの盛り上がりが、今日の美しい津和野の自然環境を守り、保存され、観光の発展につながってきたものと思われる。それは法云云以前の問題として地元住民の意識の高揚と協力体制があったからである。

津和野の歴史的な古い街並みや屋敷を見せるのは、いとも簡単なことで観光的な意義はあろうが、そこに人々が住まなければ映画のセットみたいなもので何の動きも価値もない、とは役場の課長補佐の説明である。

そこには現実に人々が居住しているという現実をふまえ、居住する人々が快適で便利な生活空間を演出して行くことが第一だという住民本位の考え方が定着している。

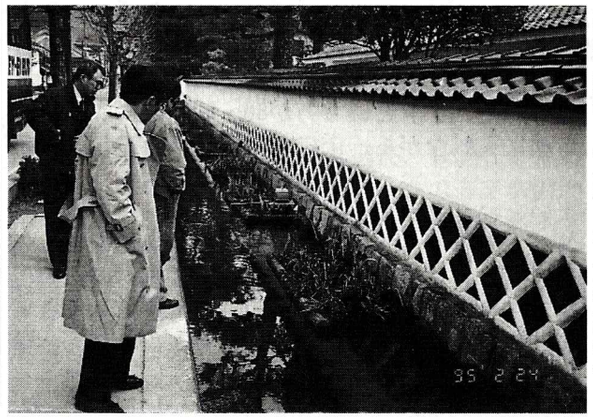
観光地として古い街並みや屋敷と居住する人々とのかかわり合いを工夫と調和をはかりながら整然と位置づけているのである。

夏のイベントとして殿町通り（鯉の泳ぐまち）一帯の堀割の白壁、教会などをライトアップし、幻想的な夜景を創り出すのも、何も観光客のためではなく地元住民が楽しむためのものである。と強調する。

殿町一帯の電柱は地下に埋設し、目立つ看板は取りはずし街路灯には亀井家の家紋を描くなど、景観形成にも細やかな気遣いを見せている。

なまこ壁の連なる裏通りの土蔵の中に骨とう店や美術館、白壁のコーヒー店など周囲の景観と調和した街並みの中に、観光地島原の修景整備を進める上で欠かせない素材をいくつも発見することができた。

今後まちづくり推進協のなかで「鯉の泳ぐまち」がどのような形で商店街や中央公園と結接機能が果たせるのか、また中央公園を核とした「鯉の泳ぐまち」のネットワーク化がどうすすめられて行くのか。具体的な内容を検討する上で今回の視察が明日への展望と個性豊かな街づくりに役立つに違いない。（鯉の泳ぐまち地区協定研究会委員）



日　時	平成７年２月２３日（木）
視察先	山口県下松市（下松駅南地区）
対応者	（市）建設部都市計画課　吉次　敦生（よしつぐ　あつなり） （地元）下松駅南地区まちづくり推進協議会 会長　田中　孝一良　（銀座屋経営）

ＪＲ下松駅の駅前広場で、全員貸切バスを降り、街なみを見学しながら、歩いて２分程の距離にある推進協議会事務所に到着し、説明を受けました。

（会長の田中さんの説明）

下松は、日立製作所笠戸工場、東洋鋼鈑、日本石油精製、中国電力、笠戸島ドッグ等の大手の企業が瀬戸内海に面して立地し、工業都市として以前より栄えてきました。現在の人口は、約 55,000 人で、近年横ばい傾向にあります。

一方、皆さんが、この下松にお越しになりますように、専門家の間では、全国的に「街づくり」で有名になっているようです。

Ｈ５．１１．３　　下松市文化健康センターが、完成オープン
　　１１．５　　西友を核とした下松市タウンセンターが、完成オープン

同時に、地元では都市活力再生拠点整備事業（リジューム計画）ということで、商業の活性化と居住環境の整備ということで取り組んでいます。このような活動がたいへん注目を集めている街です。

下松市のリジューム計画は、国の都市活力再生拠点整備事業が、昭和62年にできたのを受け、市で調査・策定をして頂き、昭和63年３月に皆さんのお手元にあります「２１世紀のまちづくり」という概要版ができ、地元の商工会議所の方にも説明がありました。

また、下松市は戦災にあっておらず古い木造家屋が多く、都市基盤整備が遅れ、約５、６年ごとに再開発をしようという機運が盛り上がっては消えるという状況で、計画はあるものの、具体的な取り組みまで至っておりませんでした。

昭和63年の市の報告の時にも申しましたが、“机上の空論”ではいけない。“絵に書いた餅”でいつも終わっていましたので、どうにか具体的に取り組む必要があるということで、その取り組みが現在まで続いてきています。

市では全体計画として、下松駅南地区再生計画(24.2ha)を策定し、このうち緊急に整備する必要がある地区については、下松駅南地区街区整備計画(4.1ha) を策定されました。このマスタープランを地元に報告し、後は地元で頑張って下さいという話でありました。

しかし、地元の方でも参加意識のある方もいれば、反対の方もいますし、欠席者の方にも説明をして頂きたいということで、12町内に説明をして頂きました。アンケートを取りましても「この街をどうにかしてもらいたい。」という方が80～90%いますし、ほとんどの方が賛成でしたので、その点も考慮に入れながら、市にマスタープランの説明をして頂きました。

その後、地元で組織を作ったがよいということで、平成元年６月20日「下松駅南地区まちづくり推進協議会」が発足し、各ブロックから３、４名の代表者に出て頂き、今日まで運営しております。各ブロックの代表者としては、商業者の代表、権利者の代表、銀行が多いので金融関係の方々です。当初20名から始め会費 1,000円／月で運営してきました。それを受けて、市の方では最初の年 220万の助成をして頂き、会費と合わせて、事業に取り組みました。

協議会の最初の取り組みは、最初の２年間は、全国各地の視察を行いました。夫婦一緒

の参加とか、各グループごとに分かれて、バスを借り上げていろんな所に行き、①共通の問題意識を持っていたということと②全国には、いろんな街づくりがあるが、下松には下松にあった地域の特性を生かした街づくりをしないと、将来同じような街になってしまい魅力は出てこないという、２つの点が視察を通じてわかり、いろいろ協議をする中で、自分たちにあった街を作ろうということが、今の取り組みの１つになっています。

☆視察先

山口県内	下関の「カラトピア」
福岡県	西鉄本線たかみや駅前の「ピアたかみや」
広島県	広島アルパーク、たけはら（かけはら？）
岡山県	つやま、びぜん、倉敷、水島、小島
関西方面	神戸、川西、宝塚
奈良県	さくらい
滋賀県	草津、長浜の楽市
愛知県	名古屋市のおおとみ商店街「ドズモール」
三重県	まつざか
関東方面	鹿島市、横浜のもとまち、伊勢佐木町

以上の所を視察し、共通の問題意識を持っていろいろ同じレベルで、ものを考えられるようになったということが、大きな財産となっています。

また、平成２年に県の事業で中小商業活性化基金を使って、「リフレッシュニュー元町」という名称で取り組みを行いました。県から 360万の助成を受け、イメージパース、都市計画道路西本通線のたたき台（ 1.5mセットバック、街路灯、街路樹、電線の地中化の問題）などについて、地元の徳山女子大の大学の先生、高専の先生、現在も協力指導を受けている建築設計の専門家の方々に中に入ってもらい、たたき台を作り、いろいろな提案がなされ、２年目は、このような街づくりの取り組みを行いました。それを受け、地元の各ブロックごとに提案がなされ、協議を重ね、元町西２－１地区のブロックで平成３年度、４年度にかけて全国初の「地区再開発促進事業」が行われました。

（◎補助対象の要件　権利者が、２件以上、面積 500m²以上）

これは、この地区が建設大臣の承認を受けているため、このような事業ができます。

古い建物の調査費、新しい建物の計画費、土地等の調査費、古い建物の解体について、２／３の補助を受けています。

それでも、新築をする場合、事業費に大きな負担がかかるということで、市と協議する中で、今まで古い建物の補償がなかったのが、補償されるようになり、これが大きな資金となりました。

市街地再開発事業については、Ａ調査、Ｂ調査と進めていき、法的なスケジュールを経ないと、事業ができません。本町ブロックの方で市街地再開発事業に取り組んでいます。平成５年６月８日に準備組合が設立され、今日に至っており、現在足ぶみの状況ですが、ぜひ前に進むようにしたいと考えております。

下松駅前では、ターミナル性（バスターミナルがある）と市の玄関口（ＪＲ下松駅がある）でありますので、ホテル等ができたらどうだろうかという提案もなされています。今後は、地権者をまとめて、事業を進めないといけない。

現在、元町西１－１地区で、本年度 1,200万の調査費がつきまして、１階が店舗、２～８階を住宅にする計画で地権者等とも協議しています。

（市の吉次さんの説明）

協議会の事務局を市の都市計画課が行っています。協議会への市の支援として

①市からの助成金　②市の担当者の専従　③コンサルタント派遣費

１年目　　220万の助成

２年目～６年目　　年間約 180万の助成

最初の１、２年は視察に行くことが多かったが、最近は視察に行くこともありません。逆に視察に来られる方が多いです。

平成６年の１年間で、この事業所だけで、32団体約 360人が視察に来られました。タウンセンターと合わせると50団体より多くなると思われます。

視察に来られて、駅前に人が歩いていないのではないか。雑誌等を見られて事業をされたと書いてあるので、たいていの方は地元に帰られて、このような建て替えがすぐにできるのではないかと思われるようですが、帰って地元の協議会、コンサルタント、行政もまじえて、いざやってみると、いろいろ問題がありなかなか進まない。建物調査をするだけでも、隣りとの境の問題があり、実際に動いていくといろいろ問題があります。

どこも大型店ともども既存の商店街をいかに動かしていくかが重要です。いろんな手法があります。商工サイド、建設サイドとどこも危機感を持ってやられていると思います。

当初ボランティアでやってもらっていた地元の建築家グループにいろんな図面を書いてもらったり、指導を受けています。

都市計画連合に当初マスタープランを作って頂き、昭和62年から来て頂いており、年に２、３回の費用ですが、いろんな事業が動いている関係上、月に２、３回来てもらっています。

こういうことを聞かれますと、視察に来られた商工会の人は、行政はよく支援しているな。行政の人は、地元はよく協議会等をやっているな。お互いいい所しか残らなくて。

私どもの協議会は、毎週木曜日（木曜会）、ここの事務所を夜８時に開けておりまして、商店街の人は自由に入って来ることができ、いろんな話、時には世間話等をしながら、毎週多くても、少なくても開いています。現在、いろんな事業が動いていますが、先程話ました商店街への入口の一階が店舗、２階から８階が住宅の所では、毎週土曜日に集まっています。また、再開発の準備組合の地区も、毎週火曜日にここの事務所に集まっています。このように、地元の各地区もそれぞれ熱意を持って集まっておられて、それに行政もお手伝いしています。

協議会

(1) 会員２４名、会費2,000 円／月

(2) 毎月２５日、全体会議を開いている。

(3) 内容　地元の金融機関の支店長さん、担当の都市計画課長・課長補佐、商工観光課長・課長補佐・係長、商工会議所の専務、中小企業相談所の所長が集まり、一か月にあったいろんな取り組み、視察とか、各ブロック・各委員会・各地区の取り組みを報告をしてもらい、同じ認識でいろんな街づくりを進めています。何らかの形で、ここの部屋の明かりがついています。

会長は、申しませんでしたが、会長の理論といたしまして、

「片手にそろばん、片手に夢とロマン」でみんなを説得して、ある意味では人間関係で街づくりを進めています。

また、協議会の会長・副会長等の三役が、市長・助役に昨年１年間に13回、いろんな陳情とか、現状報告とか、これからこの地区をどうしたいとか、について話をしに行き、逆に市長、助役から励まされたこともありました。地元の新聞社に、リジュームの歌を作っていただきました。地元の新聞記者、テレビ局の方もこの街の応援団となっています。

その都度、ハード、ハードと言ってもハートを伴わないと、こういう開発は進みません。地元の皆さんが、がんばっている中に、地元の新聞社等も応援団となってがんばっています。協議会の姿勢としては、２人以上の権利者で、できる所から一つずつ、そういう取り組みをしていく中で、将来的には駅前も動いていけばと考えています。商工会議所会頭の方もタウンセンターで、全国的に有名になりましたが、地元の商店街にもいろんなバックアップをしてもらっています。

会議所の会頭の口ぐせに、地元に足りないものが５つあるとのことです。

①一戸建の住宅が少ない。②ホテルがない。③土産品物屋さんが少ない。④テレビのチャンネルが少ない。⑤駅前の顔がない。（②、③、⑤は駅前を指す。）

市役所も、昔このビルをやる時は、できないだろうという人が多かった。最近、地元で一つ一つできている地元の熱意の中で、市役所職員の意識改革も進み、次はどこをやるのか、隣りの銀行はいつ解体するのか。そういう話が逆に出てくるようになった。行政、商工会議所も地元の熱意があるうちは、つき合うだろうし、協議会の会長、副会長がやめた時は、終わりになるでしょう。こういう人間関係の中で、街づくりを進めています。

（質疑応答）

◎質疑１

①総論賛成、各論反対という話を先程お聞きし、大変苦労されたとお聞きしましたが、実際そういう反対者をどのようにして説得されましたか。島原の方でもアーケードを建てる時に、反対者がおられて商店街も大変苦労されたと話を聞きます。

②「火だね」が「火だね」をと言われますが、その「火だね」をどうやって、増やしていかれたのか。教えていただきたい。

◇応答（田中）

①ここの街も同じで、こういうことがお金も出さないで、できればいいなというのが総論で、話を詰めていった時に、お金を出すか出さないかが各論です。今現実に事業を進めていく中で、タウンセンターができて１年ちょっと経ちましたが、その周辺に店舗を借りて、商売をしようかしまいかと考える方もいらっしゃいました。ある程度、そろばんで成り立たないといけないのですが、長い間ここでいろんな面でお世話になり、住んでいますので、ここでやろうではないかと、私は口をすっぱくして言いました。この話を詰めていくと各論ではお金になるのですが、アンケートでは、賛成で、やりましょうやりましょうということになるのですが、その人の方に話が向くと、できるわけないじゃないかと反対になる。本当にここに長い間住んでいて、何十年と世話になったのは何だったかのかと、あえてまた当人にも言うし、全体の中でも言います。そこで少々の議論をします。私も説得しないといけませんし、顔色も変わります。今もそうなのですが難しいということで、鍵がかかり事業が止まるのです。そこで、その難しいという壁をいかに越えるかというのは、“地域に対する思い”と“いろんな将来に対する夢・熱意・信念”を持って、それを乗り越えるものがあるかどうかです。魅力ある街・街なみを作ろうという気持ちを持ち、地域の方に説得するなり、将来この地域に魅力あるものができますよということで、専門家の人に書いてもらったものを参考にしながら進めていき、地域の方のいろんな思いを、そのベースに反映させていきたい。次の日に、頭をたたかれるかと思うぐらい、先輩に言い過ぎて、謝りに行きなさいよと言われたこともありました。しかし、そのぐらいの協議をしないと、前に進まないのが、現在の中心市街地の空洞化が解決しない理由の一つだと思います。

②「４人のバカ」がいないといけない
- 地元のバカ
- 行政のバカ
- 専門家のバカ（地元の建築課グループに、絵を書いて頂いたりして協力してもらっています。）
- よそ者のバカ（新聞社が、記事をずっと載せてくれたり、リジュームという歌まで作ってくれた。）

できる所から、やっていこうという姿勢で今日までやってきています。
また、この言葉を大事にしています。
※「大きく見える計画も最初は、そこに住む一人一人の小さな思いから始まり、わずかなことの実行の積み重ねによって、前進していくのである。」こういった思いの積み重ねではないのかなと思っています。

◎質疑２
こういう商店街で昔から、住んでいるお年寄り、商売やっているけど自分たちの代で終わりだからいいやという方々の説得はどうされていますか。
◇応答
今、協議会の平均年齢が55、56歳で、みんなそれぞれ後継者の問題で悩んでいます。タウンセンターという大型店ができ、自分の子供たちに苦労はさせたくないという気持ちもあります。この街に対する思いを説得の材料として、少しずつできる所から、やっています。そういう動きがないと後継ぎをしようかという若い人たちが一緒に住もうかという気にもならないのではないでしょうか。

◎質疑３
この通りに面してセットバックをしようということで、老夫婦がやっているお店とか、別に建て直さなくてもいい、子供がいるわけでもなく、今のままで住んでいようといった感じの人々にはどうされますか。
◇応答
今の状況だと空き店舗になるでしょう。街ができてくると空き店舗を貸して下さいという状況を作るのが、私たちの仕事だと思います。住んでみたい街を作ろう。買い物をしてみたい街を作ろうという思いが、このマスタープランにもうたってありますので、５年、10年の計画で考えています。今の状況ではやっていないでしょう。しかし、今説得しないと、３年後はないのです。国の補助事業というのは、今年要望して今年予算がつくのではなく、今年要望して、来年市がヒアリングを受け、２年先に予算がつきます。ですから、具体的にやっていこうかということをまとめて行かないと３年先はない。
（吉次）
この事業（リジューム計画）は、全国で初めてということで、昨年も年に３回、県と一緒に建設省に行き、地元のいろんな現状を報告して、予算獲得に努めています。しかもこの３月には、担当の係長に来て頂きます。昨年も担当の課長補佐にも来て頂き、協議会のメンバーから、現地の様子などの報告を聞いて頂きました。
この大臣承認を取っていない地区は、後継者の問題も同じですが、タウンセンターの周辺でも、駅の北でも自分で金を出してやらないといけない。建物の解体、設計、そういうものについても、補助の２／３が出ますよ。チャンスですよという話をします。よそは全部自分の金でやるんですよという話をします。あんまり補助金をあてにしてもいけませんし、本当に建て替えの意志があって後から補助金が入って来る方が事業も進みます。

建物補償も平成３年から２／３出るようになりました。地元がより事業をしやすいように、そういう補助を持ってくるのが、私たち市の仕事だと考えています。また下松市は、振興組合がありませんので、そういう高度化の融資制度がありませんでした。しかし、タウンセンターという大型店ができるということで、市の商工サイドで 3,000万まで融資制度ができ、市の単独で年に 4.5%で利子補給もあります。

◎質疑４
ここの事業所の前に、一部新しくなっている所がありますが、これは全体ができ上がった時は、「シー・ポート・シティくだまつ」をイメージして作られるのですか。
◇応答
「シー・ポート・シティくだまつ」と「星降る街」をイメージしています。

◎質疑５
全体ができ上がった時にも、大きなイベントをされると思いますが、今でもやっておられるのですか。
◇応答
毎回毎回できたところで、やっています。リジュームフェスタとか、また大型店の西友の方もイベントの企画とかに協力して頂いております。

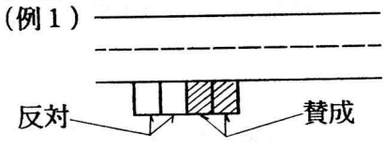
◎質疑６
タウンセンターができることについて、反対はありませんでしたか。
◇応答
やるんだったら、デパートクラスのものを呼んで来てもらわないといけないというのが、ベースにあります。すぐ隣りの市に大きな商業施設がありますので、できても最終的には吸収されるようでしたら、下松のために、何のメリットもない。ですから、あれだけのタウンセンターを作って周辺から人をひっぱって来ています。年間 560万人の来店がありますが、まだ周辺には波及効果が現れていません。いかんせん、ここは基盤整備ができておりませんので、お客さんが行ってみようという魅力がありません。その魅力を作るのが仕事です。
（吉次）
タウンセンターに西友が来るということになり、隣りの徳山商店街があせって、台風の目になっている下松のの商店街の動きに注目をしていました。地元の商店街としては、西友のいるタウンセンターに入るのも地獄、ここに残るのも地獄という状況でありました。この事業をやったためか、ここの通りの 300mに関してはタウンセンターに入った所はありませんでした。タウンセンターに地元が45店入っていますが、年間 560万人の来店があるからといって、どれだけの人が、その店に入っているのかは、わかりません。一生懸命やっていらっしゃると思います。

◎質疑７
採算ベースはどうですか。
◇応答
目標は、タウンセンター全体で 170億円、実際は 156億円。
地元の商店街が入っている「星プラザ」が、98%の達成。

◎質疑８
昭和30年代には、ここの商店街にはアーケードがあったとお聞きしていますが、それがなくなった理由は、どうしてですか。
◇応答
モータリゼーションで、車社会になり、人が通らなくなった。アーケードが古くなったという理由から、車を通れるようにしようということになり、組合で駐車場を作ったりもしました。一方では、反対される方もいました。

◎質疑９
補助事業ばかりあてにするのも、よくないと思いますが、地元にどういう条件が整えばそういう制度が受けられるのか。またその制度の中で受けられるものは、どれとどれか。もう少し詳しく話して頂きたい。
◇応答
市が24.2haの地区について、現況調査等を行い、昭和63年にマスタープランを策定しています。将来どういう街にしたいかをこのマスタープランをベースに地元と一緒になって協議しています。このうち地元がまとまった所について、協議会ができ行政の方では、建設大臣の承認を取って頂きました。ここは、やりますよというお墨付きのようなもので、大きなステップでした。それから、いろんな補助事業が受けられるようになりました。島原市の方では、マスタープラン（案）の提案段階で地元の推進協議会ができたところとお聞きしております。こちらの下松の推進協議会の中でも、いろいろ詰めていけば反対の方もいるし、賛成の方もいる状況です。「地区再開発促進事業」は地区の中で、条件として地権者２けん以上、面積1,000 ㎡以上ですが、「街区整備計画」と合わせて、面積緩和で 500㎡以上でできるようになっております。ただし、建て替えの時は、木造はいけない。マスタープランは策定しても、大臣承認はとっていないところもある。ただし、大臣承認をとったからといって、その事業がうまくいくかというとうまくいかないところが多い。反対の方を説得するエネルギー、思いが必要です。

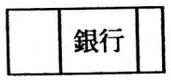
（例１）



道路の中心線から

500 ㎡以上

（例２）



銀行だけで 500㎡以上あるが、１けんではできない。
銀行が建て替えの時期に来ておりできたら補助を受けたいが両隣りが反対で説得が必要。

補助事業がありますよという説得材料は、大臣承認をとられたならば、他の方にも言ってもよいと思います。

・設計料　・地質調査　・建物調査

	（収入）	（支出）
建設費		3000万円
解体	200 万円 (2/3 補助)	300万円
設計	200 万円 (2/3 補助)	300万円
	……	……
建物補償	1000 万円	
	1400 万円	4000万円

※建物補償は、都市計画道路にかかるところ。「地区再開発促進事業」「街区整備計画」は、公共部分の道路を生み出しながら、建物の整備を図る。島原市が取り組んでいる「街なみ環境整備事業」とは、違う。
話を下松に戻しまして、事業手法はいろいろ違いますが、解体、設計とかに先に、皆さんがお金を払わないとできない。地元の方の見積書をもとに市が補助金申請を国に行い、地元の方がお金の支払いを行い、領収書を提出してもらわないと、国の補助金は受けられない。

日　時　　平成７年２月２３日（木）
視察先　　山口県下松市（下松タウンセンター）
対応者　　財団法人下松市文化振興財団　事務局次長　政元伸太

次に、全員貸切バスに乗り、下松タウンセンターへ行き、政元さんの説明を受ける。
大ホール　⇨　２階展示ホール　⇨　１階市民ロビー（ハイビジョン）

下松市の財政は、昨年度 185億円程度で、税収が約90億円です。かなりの借金をして、下松市文化健康センターは完成しています。下松市文化健康センター内の文化会館（客席1,000 席）や大ホール等の公共施設の運営については、市単独の持ち出しがほとんどで、市の財政に戻ってくるのは、20～30％程度である。

（質疑応答）
◎質疑１
大ホールの使用頻度は、どれぐらいですか。
◇応答（政元）
毎週土日、ほとんど１年間使っています。

◎質疑２
このような文化会館は、他にないのですか。
◇応答（政元）
ありません。ただし、映画館の跡地を利用した市民会館があります。客席約 700席。

日　時　　平成７年２月２４日（金）
津和野町に到着するまでの間、バスの中での昨日の反省

(1) 講演会を田中会長さんに、いつかして頂くようにお願いしました。
(2) 下松タウンセンターができたため、岩国とかに買い物に行かれていた人が、雨の日は地元の下松タウンセンターで買うようになりました。ただし、２割程駅前の買い物人口が減ったとのこと。
(3) 交代の時の通り道ではあるが、城下町ではない。昔から漁業が盛んである。
(4) 昔、間口税を取っていたので、間口は狭いが、奥行きが広い。そのためセット　バックに適しているようである。
(5) 下松の近くの長浜という所も視察してはどうかという意見を聞きました。

(6) 視察のための事前勉強が、不足していたようだ。
①説明の時の資料は、事前に取り寄せる。
②ビデオ等で十分勉強し、質問は整理し事前に送ってもよいだろう。
③バスの中で、質問の予行演習は、具の骨頂である。忙しい中に、時間とお金をかけて来ているのだから。
(7) 危機感がないといけない。左うちわでもいけない。しかし、本当に危なくなった時はどうにもならないので、その時期が重要である。
(8) ４人のバカが必要。行政を動かす地元の熱意も必要。新聞社の人、銀行の人等とか。
(9) 島原は、災害で大変でしょうが、知名度はあるのでがんばって下さいとのこと。島原に視察に来てもらうようにがんばりましょう。
(10) テレビＱの朝９：３０、下松市が「村おこし、町おこし」のテレビ番組に出ます。

日　時　　平成７年２月２４日（金）
視察先　　島根県津和野町
対応者　（市）　商工観光課　山岡浩二　課長補佐
　　企画財政課　村田隆昭　主任主事
　　企画財政課　齋藤道夫
　　（地元）石川卓夫（石川建築設計室）

（山岡さんの説明）
・津和野町は、広島県、山口県とのつながりが強い。
・「山陰の小京都」と言われ、毎年 120万人前後の観光客が訪れています。
・津和野町の人口は、6,800 人を切っています。面積139.85ｋｍ² です。
・環境保全条例
①昭和48年制定。当時は、他に例がなく、画期的な条例制定であった。
②制定された理由
　まちの景観を守っていこうという住民の盛り上がりから始まり、行政が動いた。
地元住民の中で、条例の内容について、審議委員会ができた。
③内容
・罰則規定はない。
・役場から、補助金を出したことはない。
・住民の盛り上がりから条例ができたため、景観にそぐわない建物を建てようとされる場合、市からお願いすれば、ほぼ理解が得られた。いくつか難しい事例もあった。

（石川さんの説明）
・都市計画地域の指定はあるが、用途地域指定はない。
・都市計画道路が、たくさんある。（予定）
・建築確認申請の書類を市に提出すると同時に、環境保全条例に合致するかどうかのチェックがされ、合わないと申請が受けけつけられないとのこと。ただし、現状では確認申請が必要でない部分が多いため、規制がされていない状況にあるが、町民の要望でできた条例であるため、条例がしぜんと守られ、おかしい建物はほとんどありません。
・津和野町地域住宅計画（ＨＯＰＥ計画）でやっていることは、津和野町の歴史的街なみの位置づけと現在残っているものは何があるか。それをこれから、いかに快適な環境に

持って行き、いかに快適な住宅作りができるかを示しています。
・住宅に関して、間口が狭く、奥行きが広い古い建物が多い。
・過去の歴史的遺産を観光で食いつぶしている。現在、将来に向けての新しい街なみ整備はあまりできていないが、できつつある例として津和野川の津和野大橋周辺の整備があります。
・現在、町民のほんんどが、買い物は大規模店のある都市部へ行っています。
津和野の位置としては、山口県庁から、車で１時間。広島まで高速で２時間。徳山まで１時間30分。
・外から来る観光客のための街づくりが行われ、地元の人が置いてきぼりをしている感じである。これからは、地元住民のための街づくりをしないといけない。そのため商店街活性化事業やＨＯＰＥ計画等をしています。
・津和野川が、ふるさとの川モデル事業（建設省）により、コンクリートの三面張りではなく、景観に配慮した石積みとか、川沿いに緑を多くしたりしています。
・住宅の横を流れている水路は、大きい川から水を引き、また大きい川に水を戻しています。この水路は江戸時代のものが、そのまま残り、側溝として利用されています。
また、町では水を利用して昭和40年代終わり頃までは、各家庭で鯉を飼っていました。こういうことから、“鯉の泳ぐまち”と呼ばれていました。昭和30年代、40年代は、トイレも水洗でなく、化学洗剤も使っていなっかったので、水路に流しても、水路自体に水が多く、浄化作用もあった。しかし、最近になり、生活排水の変化・化学物質の変化・道路が狭いという意見・家の前の道路と家の間に橋があり、子供が落ちて危ないという意見が多くなり、水路・側溝にふたをかけ、だんだん隠れていくので、昔と比べて汚れています。
・下水道はない。時間とお金がかかるので、進んでいない。
・合併処理浄化槽
　住宅については、国からの補助があり平成６年度内に何件か設置するようにしています。観光関係等の商業関係は、補助がなく困っています。

（質疑応答）
◎質疑１
女性に人気のある秘密、コツとかはありますか。
◇応答
昭和50年代を境にして、マスメディアにのって、津和野が有名になり、それまでの観光客数が、年間50～60万人だったのが、 100万人台になり、昭和54年の 150万人のピークを向かえ、現在約 120万人となっています。
雑誌「アンアン」「ノンノン」に萩とともに取り上げられたことも、観光客が増えた原因の一つだと考えています。また、３、４人の女性グループが多く地元では“アンノン族”と呼んでいます。また、津和野は、大きな観光施設があるのでもなく、イメージの街ではないかと思っています。

◎質疑２
下水道のこれからの取り組みは、どのように予定されていますか。
◇応答
環境保全条例という名称で、実質は、景観条例のという意味合いが強く、これをもう少しパワーアップしようとしています。その中で、水質の保全を含め、ここ数年のうちに基本計画を策定しようと考えています。

◎質疑３
本格的に、商業診断とか、観光診断を受けたことはありますか。
◇応答
その中身としては、地元の消費者がほしいものがない。後継者がいない。観光の視点から、商業関係をみますと、行政も地元も手つかず、なすがままの状態です。
商工会議所青年部も約20名。定年を40才から45才まで上げようとする話もあるが難しい状況です。

◎質疑４
環境保全条例では、罰則も補助金もないとのことだが、これからどのようにパワーアップしようと考えておられるのか。
◇応答
罰則については、これからも無理だろうし、景観表彰とかを行い、ほめるように考えています。また、条例に反する建築物の事例もありましたが、当初より高さを低くしてもらうことやなるべく派手にしないことで、決着がついたりしました。
補助金については、これから考えていこうと思います。

◎質疑５
地元が観光客で、生計を立てているという意識を持っていらっしゃると思いますが、地元の観光に対する理解の度合いと、逆に観光客が来て迷惑するという点は、どうですか。
◇応答
サラリーマンとか農業者の間では、観光業にアレルギーを持っています。大型バスが来ればじゃまだとか。観光客がたくさん訪れても、何のメリットもないと思われている方が多い。逆に、観光客が来なかったら、どうするんだということについては考えず、目先のことばかり考えているようです。レストランでも、地元の野菜等を多く使っているので、農業者の方も恩恵を受けていると思います。また、役場としては、観光客を活かした農業のあり方についても考えています。

◎質疑６
自分たちが住みやすい環境を考えつつ、どのように観光客に対応されているのか。
◇応答
津和野町９町内で、観光客が訪れる所は、一部です。ですから、自分たちが、どうしたら住みやすいかを追求して、その街なみを観光客に見せるという方向で進めたいと考えています。それだけの材料は、まだこの街なみに残っていると思われます。津和野町役場も大正８年に建設され、現在も使いながら生活感のあるところを見せていこうと思います。観光の他に基幹産業がないので、観光を中心にしながら私たち地元住民の生活も大事にしていこうと考えています。

日　時　　平成７年２月２４日（金）
島原に帰るバスの中での意見交換

(1) 今回の視察研修が、いかに大切かを考えてほしい。これが、できなければ島原市は、再生しないんだ。いかに島原をアピールできるか考えてほしい。
市、商工会議所、地元住民、商売人等が協力して、官民一体となって旗上げをし事業を進めないといけない。よろしくご協力お願いいたします。

(2) 山口県下松市の「下松駅南地区まちづくり推進協議会」の田中会長さんと市の吉次さんの昼間の説明の中で、聞けなかった話を夜の木曜会という会議に参加し、聞いてきましたので報告します。事業が進むにつれて、自分の土地に少しでもかかったり、お金を出さなければいけない段階になると反対されるようになるとのことです。その時にどうやってクリアーされてきたのかを聞きました。一つの事例として、用地取得のために、二十数回通ったこともあったとのことです。そのように熱意がないとできない。昨日の一番の収穫点としては、「熱意」と「４人のバカ＝地元のバカ、行政のバカ、専門家のバカ、よそもののバカ」が必要だということです。

(3) 今回の視察では、もう少し現場を見る時間がほしかった。あの現場にもう１、２時間いたかった。もう一回行けばいいことですが、往復約１２時間もかかるとなかなか行けません。次回は、質問の時間も含めてもう少し余裕のある行程にしてほしいです。
また、視察に誘って下さい。

(4) 木曜会に参加して、後継者がいないいないと言いながら、50代、60代の方々が明るい声で話をされているのに、関心しました。また下松（くだまつ）の場合、名前も知らない人が多いいのですが、島原の場合、よく知られているので、その点も含めて素材を十二分に活かし、20年、30年先には島原に視察に来られる人の対応で仕事ができなくなるぐらい忙しくなり、あの時にがんばってよかったなと思えるようにがんばりたいというのが実感です。

(5) 下松のことが印象に残りました。私も木曜会に参加して、一番できる所から、まず初めにやり、必ずやらなければいけない所からしなさいとのことでした。下松の人はとにかくがんばっていらっしゃいました。私たちもその点を見習い、強い精神力を持ち、めげずに壁を乗り越えたいと思います。

(6) 今日の津和野ももう少し時間を取って見たかったなと思いましたし、役場の方とももう少し意見交換をしたかったです。２日間お疲れさまでした。

(7) 私たちにとってラッキーだったのは、下松の件です。皆さんも同じだと思いますが、下松は、一体何県にあるんだろうかという認識だったと思います。事前の資料で、勉強してはいたものの、いざ行ってみると自分たちと同じ立場で苦労されている先輩ということがわかり、非常に参考になることが多かったと思います。
下松の田中さんの話の中で、日本全国を視察に回って絶えず考えていたことは、では、下松ではどうしたがいいのか。下松らしさを意識して視察をされたとのことです。

そして、私たちには、島原らしさ、島原の独自性を絶えず考えて、島原に合わないものは、きっぱり拒否したがよい。視察慣れをしていないと視察に行った所のいい所ばかりが目について、なんでも取り入れようとしてしまう。それでは、いけない。津和野で現地視察をしていたところ、石川建築設計室の石川さんに会い、現場に行きますということで挨拶をされて行かれました。私たちのために貴重な時間をさいていらっしゃったのだなあと感じ、有難いなと思いました。

(8) 下松の場合、都市計画街路の事業と一緒に街の整備が、行われています。島原では、整備予定地域の中に、都市計画街路が含まれていないので、下松とは状況が若干違います。市の道路担当者としましては、堀町縦線の拡幅整備については、以前から要望していたことなので、補助事業を取り込みながら実施に向けて努力していきたい。
津和野については、役場の前の鯉の泳ぐ水路を見てみますと、水路の前の歩道と道路がゆったりしておりました。はたして、島原の鯉の泳ぐまちでそのようにゆったりとできるのだろうかと思いました。

(9) 下松の田中さんの話から、非常に苦労されているのに、自然体でできる所からやろうというのがすばらしいと思いました。総論賛成、各論反対が多いと聞きました。確かに夢を与えていくのが総論であり、実際にやるときは、できるところからやろうという心の余裕があり、感銘を受けました。私たちも３年先、５年先のことを見据えてがんばっていきたい。また阪神大震災で阪神地方の方々は、たいへんご苦労されていますが、島原はそのような災害を受けている地域の先輩として何かできないものかと考えております。今日の津和野を見て、映画のセットみたいにきちんと整備されていますが、何か違和感があり、怖い感じがしました。もう少し切り口を変えてみたらどうかなと思いました。アンノン族は、満足するのでしょうが、地域のいろんなニーズをあまりに画一的にするのもどうかなと思いました。では、島原ではどうするのかは、これから考えていきたいと思います。有意義な視察でしたので、サンシャイン中央街に持ち帰って、みんなに話したいと思います。

(10) 事業を行うにあたっての取りかかりがわかりました。現在島原では、街づくりについてマスタープラン策定中で、その後建設大臣の承認をもらえばいいのですね。
下松タウンセンターについては、すごいなとは思いましたが、あまり魅力は感じませんでした。津和野については、水が汚いなという印象を受けました。島原の方が、水もきれいですので、今後の可能性についてはまだまだあるなと思いました。２日間を通じて、いろんな人と知り合いになれたのでよかったと思いました。

(11) 島原よりレベルがちょっと上の所を次回は、視察させていただきたい。地元からこれだけ多くの商店街の人が参加しているのに、市会議員の人が参加していないのは、さびしいなと思いました。島原では、女性の人の話では、衣類、子供服、贈り物等で買う物がないとよく聞きます。下松、津和野でも、そういう話を聞きました。

(12) 参加しなかった人や市民にも、今街づくりをやっているんだということと今やらなければいけないんだということをアピールし、地元の市民の方々も巻き込んで、機運を高めていきましょう。新聞、テレビ等も利用して、私たちの活動も随時掲載していきましょう。一番問題なのは、壁を越えなければならないその時に、どうして越えるか、なぜ越えるかその理由づけが必要となります。自分たちの街を作りたい。自分たちの夢を実現させたい。そのようなことが、説得される方のベースにあったと思います。やらなければならない、あるいはやることの難しさがわかりましたが、私としては２、３つぜひ実現に結びつけていきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

(13) 下松、津和野と視察して、島原ももっと活かせばいいものがあるということがわかり、自信を持ちました。これから、それを実際にやっていくには、今のやる気が３年間そのまま持続されれば、きっと３年後はいいものができるのではないかと思います。

(14) 津和野と島原と見比べた場合、島原の方はストーリー性がなく、各魅力スポットが個々に存在し、全然つながりがないように思えます。例えば、島原城・武家屋敷・鯉の泳ぐまち等です。ですから、これからはストーリー性があり、全体でつながりのあるような街づくりを進めていきたいと思います。津和野は、こじんまりとできているなと思いました。また、津和野には、美術館が個人のものも含めて、２つ、３つあり、島原にはきちんとしたものがないので、作っていただきたいなと思いました。また、津和野でサラリーマンとか農業者の方には、観光は何も関係ないように言われているとお聞きしましたが、昼の食事の中には、いろんな野菜が豊富に入っていましたし、観光が潤えば町全体に多かれ少なかれ、そのいい面での波及効果もあると思われます。

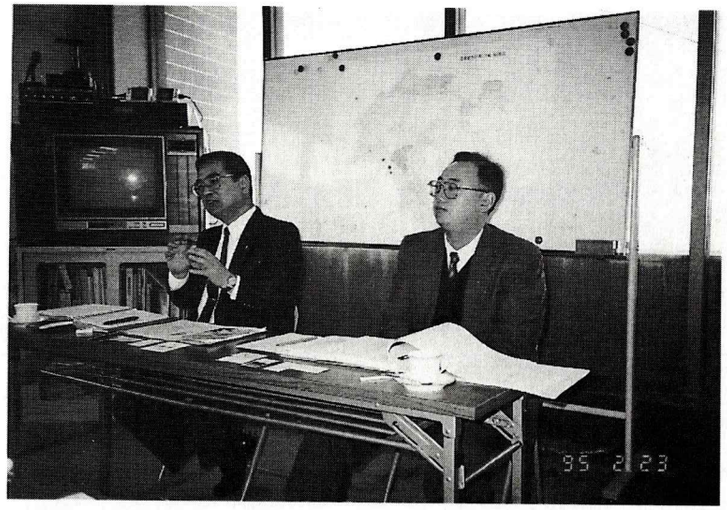
(15) 今回の視察で感じたこと、勉強したことを忘れないようにしましょう。下松駅南地区まちづくり推進協議会の田中会長さんは、できる所からしましょうというねばりと活力、一生懸命やっているという姿、街づくりを現在進行中の所を視察でき、本当にいい勉強になったと思います。今度島原に来て下さいと話したところ、ぜひ行きますということでした。聞くのと見るのは、ずいぶん違うなと思いました。これが、先進地視察なんだなと思いました。一番感銘を受けたのは、今のみなさんの発表を聞いて、みなさんがそれぞれいい勉強をされたんだなということです。

(16) 私は島原に80年住んでいますが、島原の街はさびしかねという意見を時々聞きます。私たちもなつかしんだ商店街を歩いてみて、本当に不安を感じます。商店街と一般市民とのつながりを十分とっていきましょう。また、この街づくりを進めていくにはまず３年がんばりましょう。３年後には、少しは効果が出てくるのではないでしょうか。
そして、みなさんの考えを市民に十分伝えていきましょう。市民と一体となって進めていくことで、困難な道を大いに励ますのではないかと思います。島原の大手は、大手門広場という呼び名ではどうでしょうか。

(17) 津和野の環境保全条例の説明を今日受けまして、感じたことは、条例の制定以前の問題として住民の意識、盛り上がりが必要なんだと思いました。同じ条例を市が制定するにしても、行政側から誘導するのと住民側の盛り上がりからできるのでは違う。住民パワーが必要だし、盛り上がりも必要です。住民が便利に快適に過ごせるように街づくりを進めるべきだ。観光客ばかりに目をとられていてはいけないと思います。このような視察の成果とか各研究会の内容とかも逐一住民に報告しながら学習していきましょう。

JR下松駅

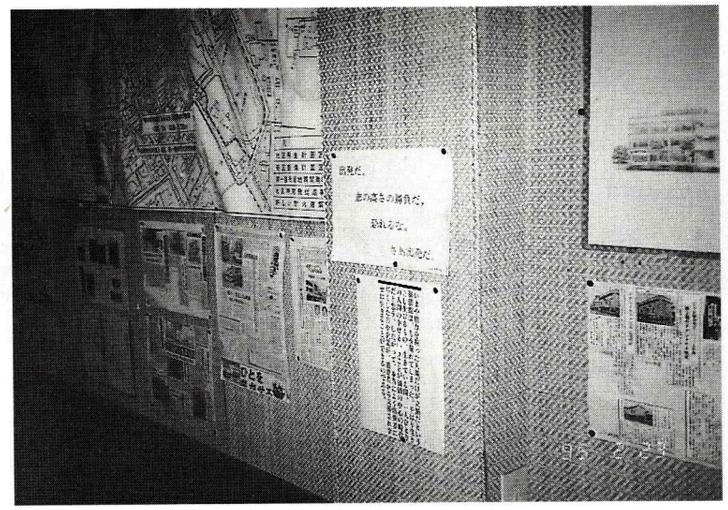
下松：地区再開発促進事業による協調建替事業が一部完成
（事業の対象は建物が2棟以上で、施行地区の面積が500㎡以上）



下松まちづくり事務所：田中氏、吉次氏

：話を聴くメンバー

完成予想図



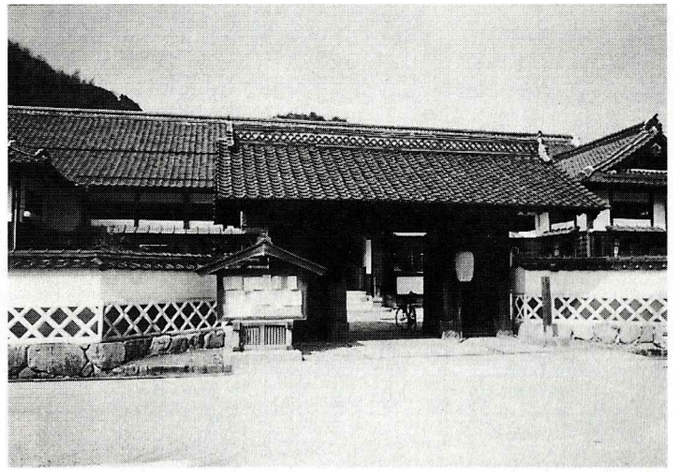
下松まちづくり事務所：壁

地区主催のイベントを開催

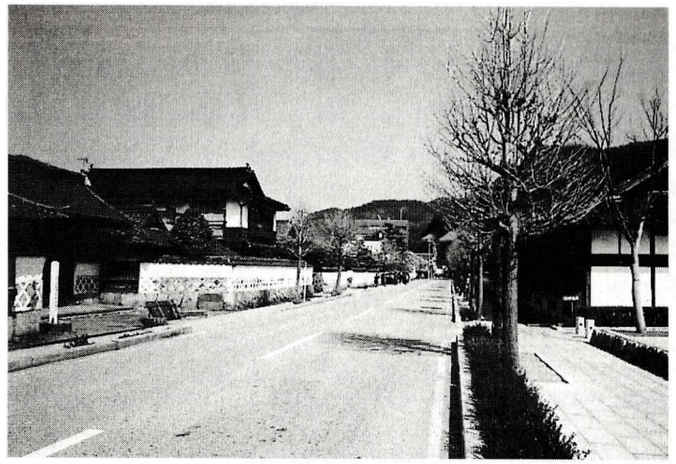
下松南地区

下松タウンセンター

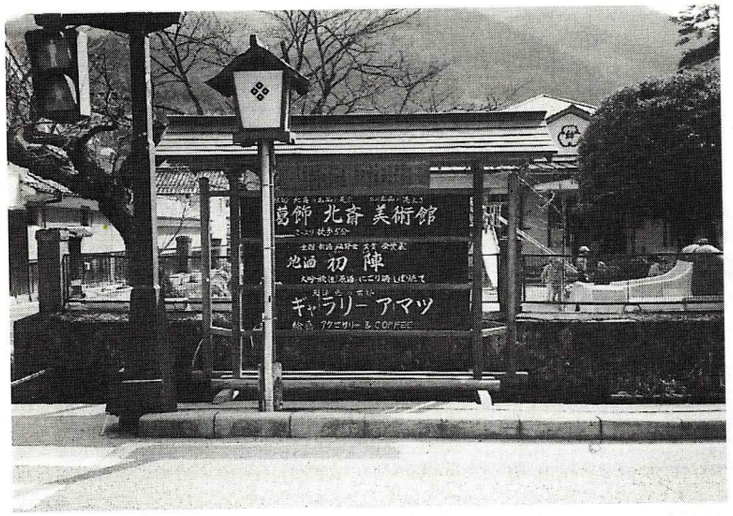
下松タウンセンター内



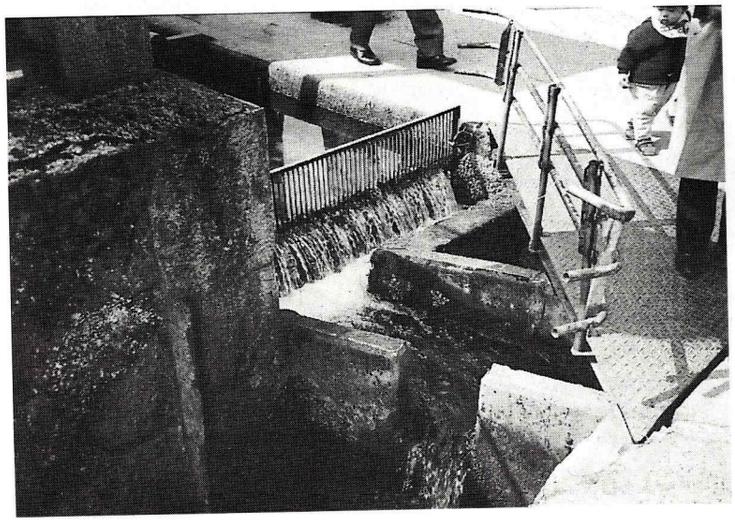
津和野町役場



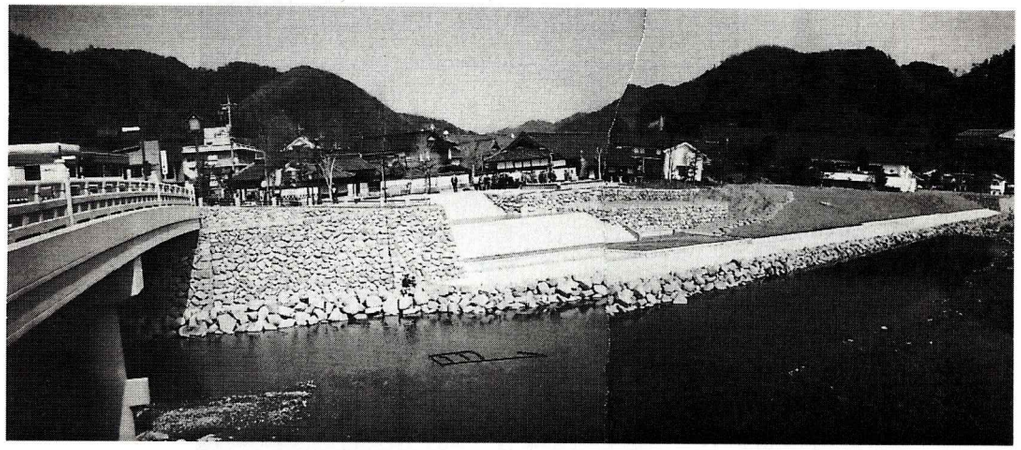
役場前通りの殿町



津和野：町中の掲示板

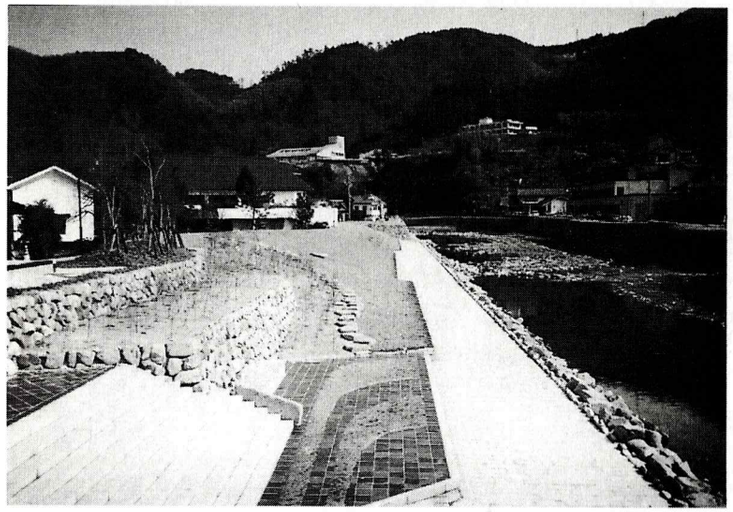


津和野：水路の分岐



1級河川津和野川

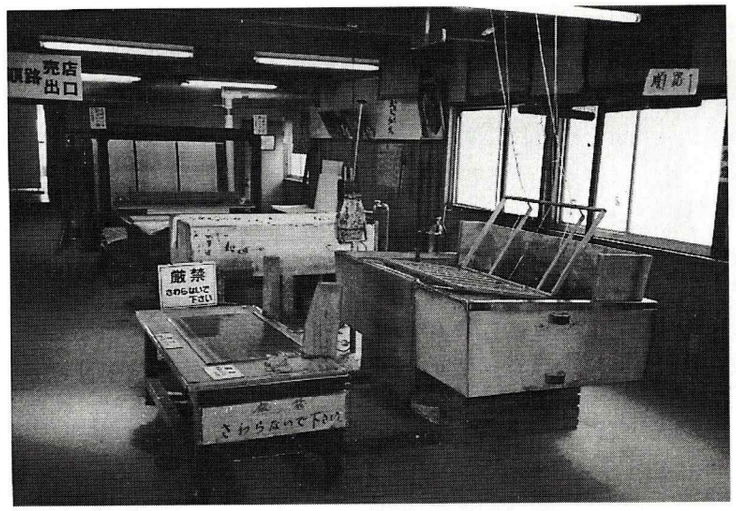
祭りや、イベントの場の創出



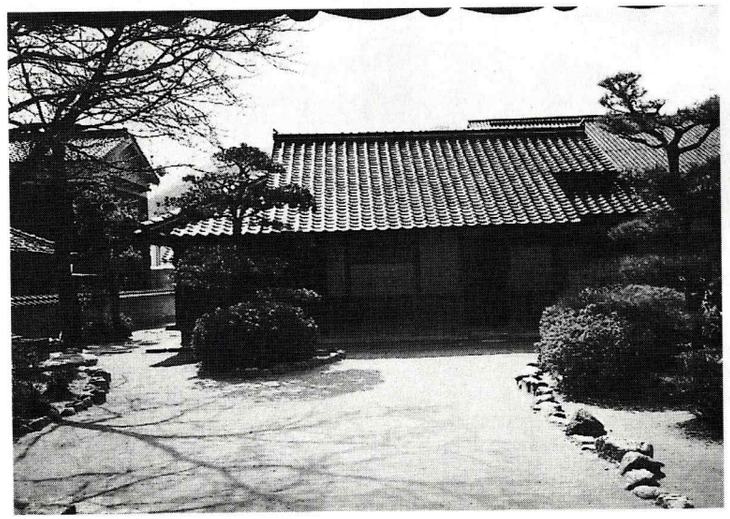
護岸は石積で、ステップ護岸を設け河原に降りられ、河川で泳ぐ鯉をいたる所で、眺められる。

楽しく散策できる護岸道路の整備

津和野：街角案内表示

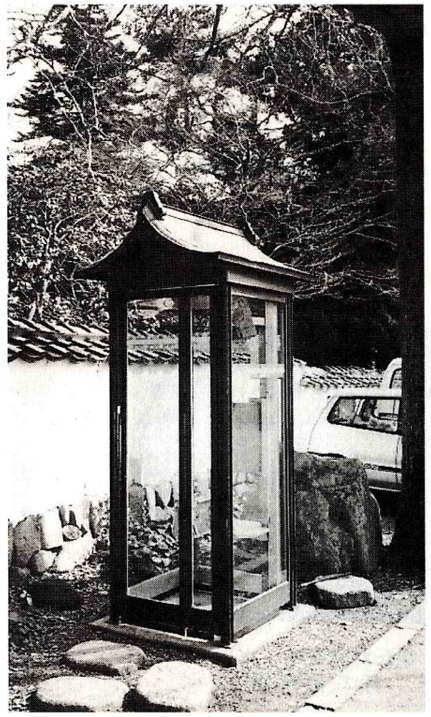


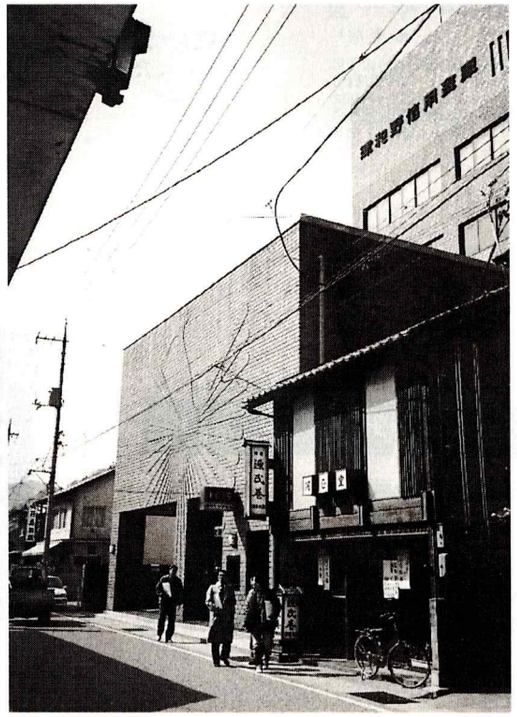
津和野：和紙の製造工程を見せるおみやげ屋さん



森鴎外旧宅

条例を守ったパチンコ屋



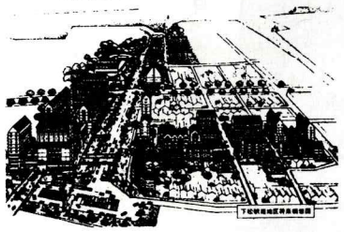


：条例違反の信用金庫

津和野役場：山岡氏、石川氏、齋藤氏

RESUME

21世紀へのまちづくり



下松駅南地区まちづくり推進協議会

会長 田中孝一良
(銀座屋)

事務局 〒744 山口県下松市大手町
(市役所内)
TEL 0833-41-1800
自宅 〒744 山口県下松市元町西
TEL 0833-41-0410

星ふるまち 下松

きれいな笠戸島で釣りをしてみませんか

下松(くだまつ)市役所
建設部都市計画課

吉次敦生(よしつぐあつなり)

〒744 山口県下松市大手町3-3-3
TEL (0833) 45-1800 (代)
FAX (0833) 44-3613

スターピアくだまつ

事務局次長
政元伸太

財団法人 下松(くだまつ)市文化振興財団

〒744 山口県下松市中央町2-1
TEL 0833-4-6800
FAX 0833-4-7723

遥外、森林太郎1862年石見の国津和野に生まれる

津和野町役場

企画財政課・企画係
齋藤道夫

〒699-56 島根県鹿足郡津和野町大字後田ロ64番地6
TEL (08567) 2-0650/FAX (08567) 2-1650

津和野町役場
商工観光課

課長補佐 山岡浩二

〒699-56
島根県鹿足郡津和野町大字後田ロ64-6
TEL (08567) 2-0650(代)
FAX (08567) 2-1650

ISHIKAWA
石川建築設計室

一級建築士 石川卓夫

〒699-56 島根県鹿足郡津和野町大字後田ロ277-6
☎&FAX(08567) 2-1637

主任主事
村田隆昭

〒699-56 島根県鹿足郡津和野町大字後田ロ六四-六
電話 (〇八五六七) 二-〇六五〇

まちづくり事例地視察
〈山口県下松／島根県津和野〉

発行日：平成７年３月31日
発　行：島原中心市街地
街づくり推進協議会
古瀬　亨